

木製農耕具の地域色とその変遷

—勝川遺跡出土資料を中心として—

樋 上 昇

I

『年報 昭和62年度』に記したように、勝川遺跡62F区からは弥生時代中期から平安時代にかけての多くの木製品が出土している。が、昨年度の『年報』では、それらのうち、弥生時代中期末のほんの一部の資料しか紹介することができなかった。そこで小論では、まずII章で現在整理の済んだもののうちから弥生時代中期末・弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代中期の3時期の資料について、農耕具を中心に紹介する。さらにIII章では、それらをもとに近畿・東海・北陸・関東の他の資料と比較検討し、農耕具の地域色とその変遷について考えてみたい。

II

遺構の概要

勝川遺跡62F区は鳥居松段丘の段丘崖と地蔵川に挟まれた沖積地に立地する。弥生時代中期末（高蔵期）には居住域と墓域は段丘上に営まれている。段丘下のこの地には第1図のように掘立柱建物群が立ち並び、地蔵川（NR01）から引いた水路（SD01）に掘り込んだ土坑（SX01）にはつくりかけの木製品を貯蔵し、加工を行う生産域となっていた。その後、地蔵川の氾濫でこれらの遺構は廃絶し、調査区東端の地蔵川北岸には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器と共に大量の木製品を投棄していた（SX05）。古墳時代中期（5世紀末頃）には、地蔵川の南に接して大型の前方後円墳が築かれた（勝川大塚古墳）。それに伴い、地蔵川の北岸には溝（あるいは周濠?）を掘り（SX03）、農耕具から武具に至るまで様々な木製品を廃棄していた。奈良時代には段丘上に寺院が建立され（勝川廃寺）、地蔵川からはそれに係わると見られる大量の墨書土器や人形・舟形などの祭祀具、そして馬鍬・大足などの農耕具が出土している。

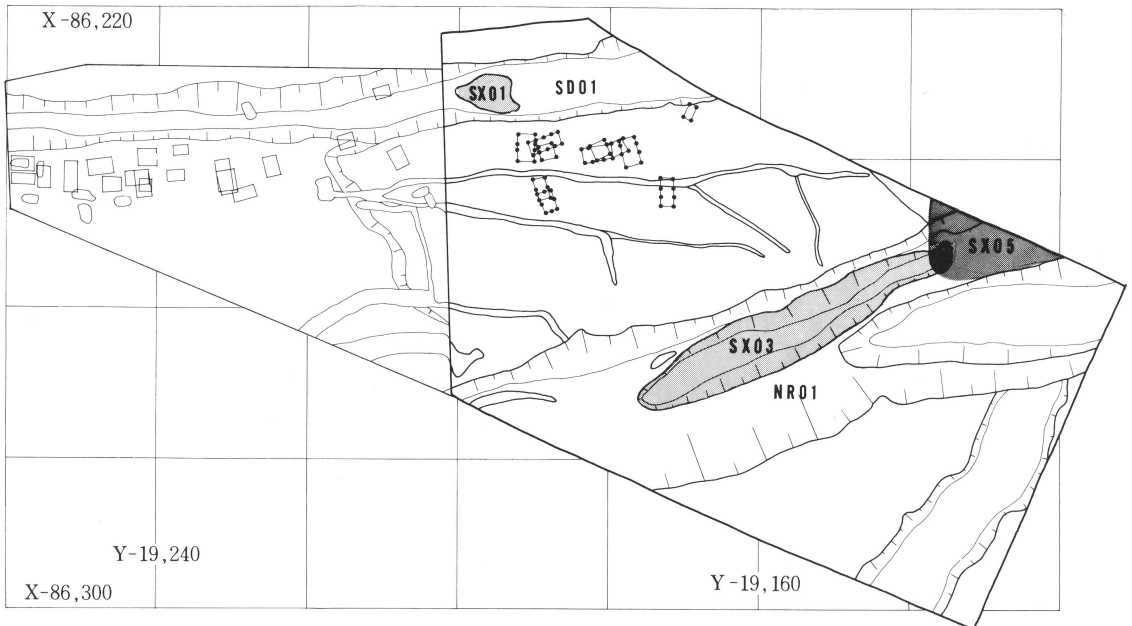
小論では、これらの遺構のうち、弥生時代中期末に属するSX01・SD01、弥生時代後期～古墳時代前期のSX05、古墳時代中期のSX03から出土した木製品を紹介していく。

なお、樹種の鑑定はパリノ・サーヴェイによる。

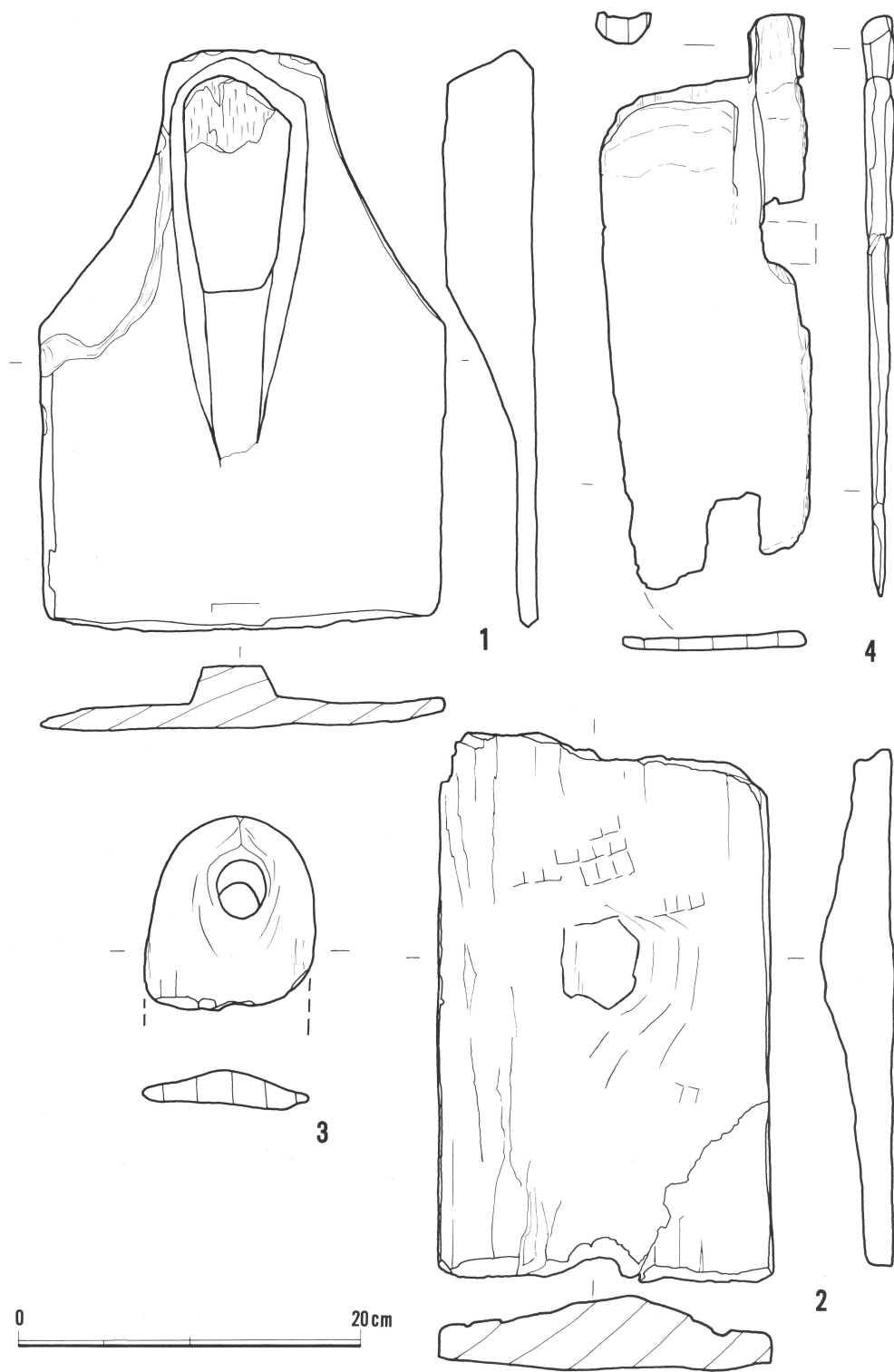
出土木製品

弥生時代中期末 (第2・3図)

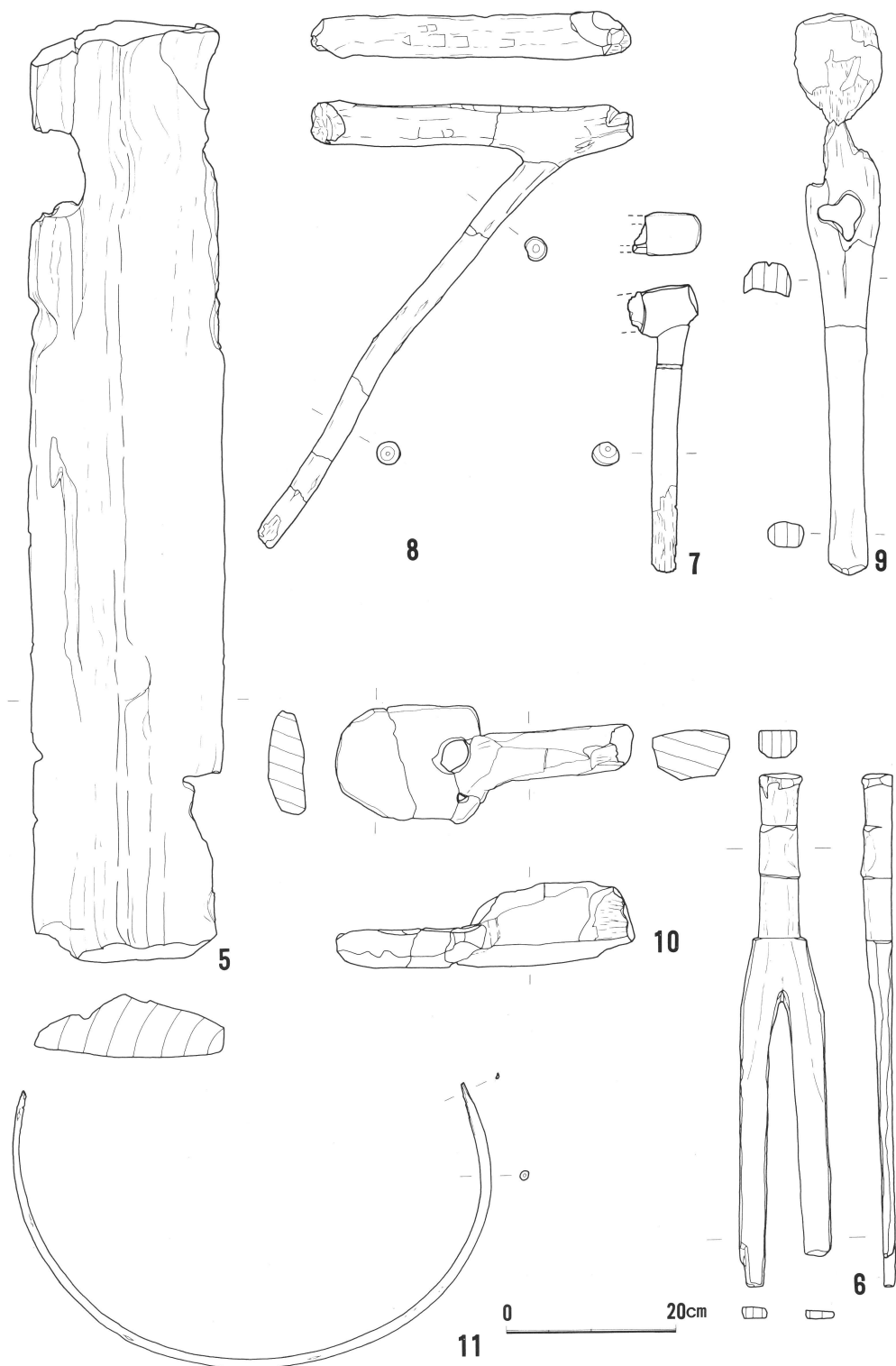
SX01・SD01から出土した木製品は、これらの遺構の性格上、その大半は未成品である。広楯の身には2タイプがある。それぞれA類(1)、B類(2)とする。樹種はいずれもコナラ属(アカガシ亜科)である。A類は他に2点見られる。また、広楯用と思われるミカン割り材も出土している(5)。全長約120 cmあり、広楯が2ないし3点とれる。(3)は狭楯の身で、刃部は欠損している。木村有作氏が小型楯と命名したものにあたる(木村1988)。樹種はコナラ属(コナラ亜科クヌギ節)。(4)は組合せ鋤の身である。直柄装着用の方形孔をもつ。樹種はコナラ属(アカガシ亜科)。(6)は町田章氏の分類にならい、膝柄^{註1}を装着する股楯という意味で、膝柄股楯Aと呼ぶことにする(町田1980)。着柄用の軸部には膝柄装着の際にズレや緩みをなくすための独特の段をつくりだし、軸部・刃部共に断面カマボコ形を呈する。樹種はコナラ属(コナラ亜属クヌギ節)である。横斧の柄には完成品(7)と未成品(8)が見られる。(7)はやや小型の柱状片刃石斧の柄で台部の下約5 cmのところには1条溝が切られている^{註2}。樹種はコナラ属(コナラ亜属クヌギ節)。(9)は縦斧の柄である樹種はコナラ属(コナラ亜属クヌギ節)。(10)は勺子の未成品で、身部に節穴があく。樹種はケヤキ。(11)はタモ杵の未成品と思われる。樹種はイヌガヤ類似種である。



第1図 勝川遺跡62F区遺構配置図



第2図 弥生時代中期末 S X 01出土木製品



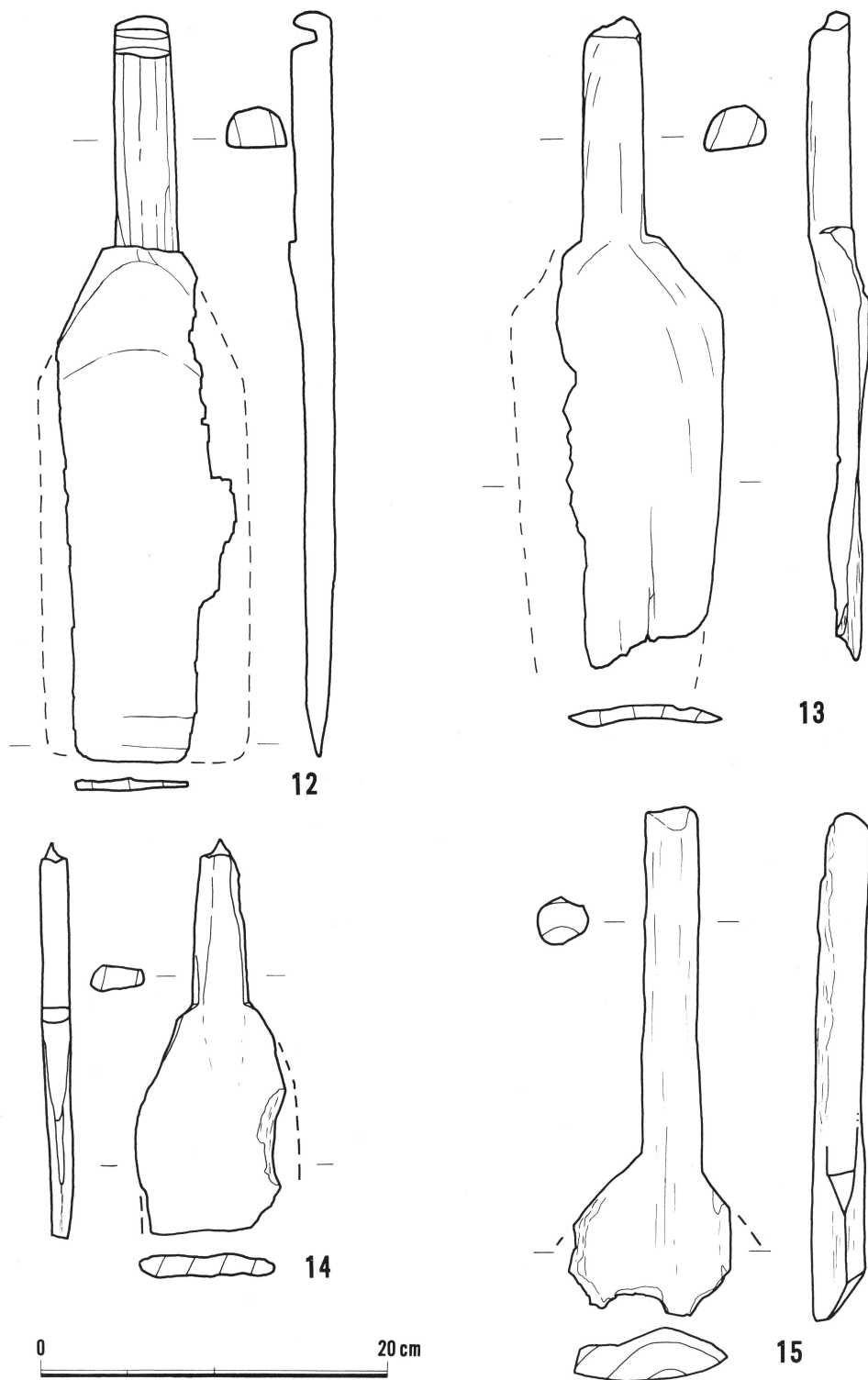
第3図 弥生時代中期末 S X01・S D01出土木製品 (6～9・11はS X01、5・11はS D01出土)

弥生時代後期～古墳時代前期（第4～6図）

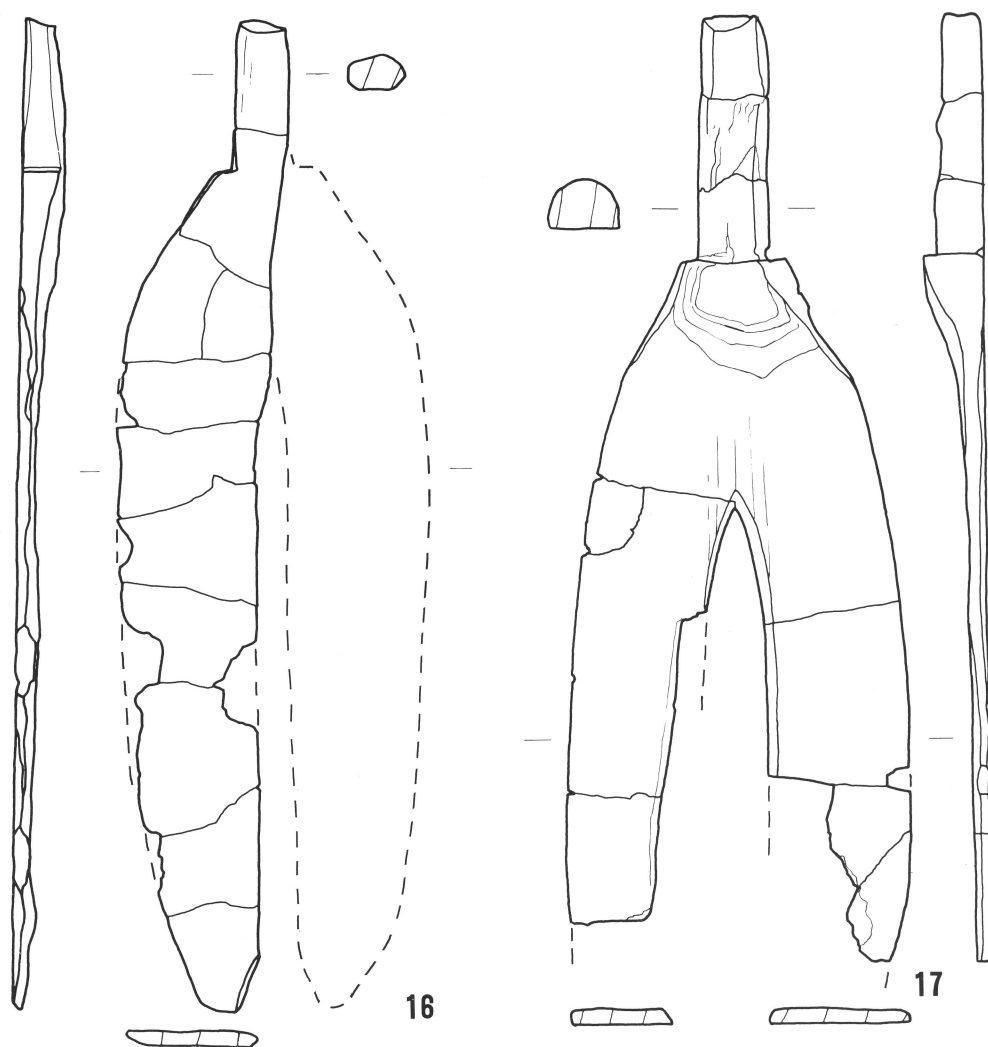
S X 05からは主に農耕具が出土している。(18)は2連の広鍬Aである。弥生時代中期のものに比べてひとまわり小さい。(12～15)は前面を平坦にして膝柄装着用の細工を施した、膝柄鍬Aである(町田1980)。肩部はナデ肩で、刃部は後面を削り込んで薄く作る。うち、(12)は軸部の上端に膝柄緊縛用の溝を切る。(15)は軸部の断面が丸く、刃部も厚い。未成品の可能性が高い。(16・17)は膝柄股鍬A。弥生時代中期の例と比べて刃部は幅が広く薄い。(17)の樹種はコナラ属(アカガシ亜属)である。(21)は斧あるいは鍬の膝柄の未成品である。樹種は斧や鍬の柄としては珍しく弾力のあるイヌガヤを用いている。(19)は一本鋤。身はほぼ完存しているが、おそらく、当初この倍の大きさはあったものを破損したためかここまで削り込んだのであろう。(20)は竖杵である。握部は極めて太く、きれいに面取りの跡が残っており、握部に向かってなだらかに細くなる。握部は1面のみに使用痕が認められる。樹種はコナラ属(アカガシ亜属)。

古墳時代中期（第7図）

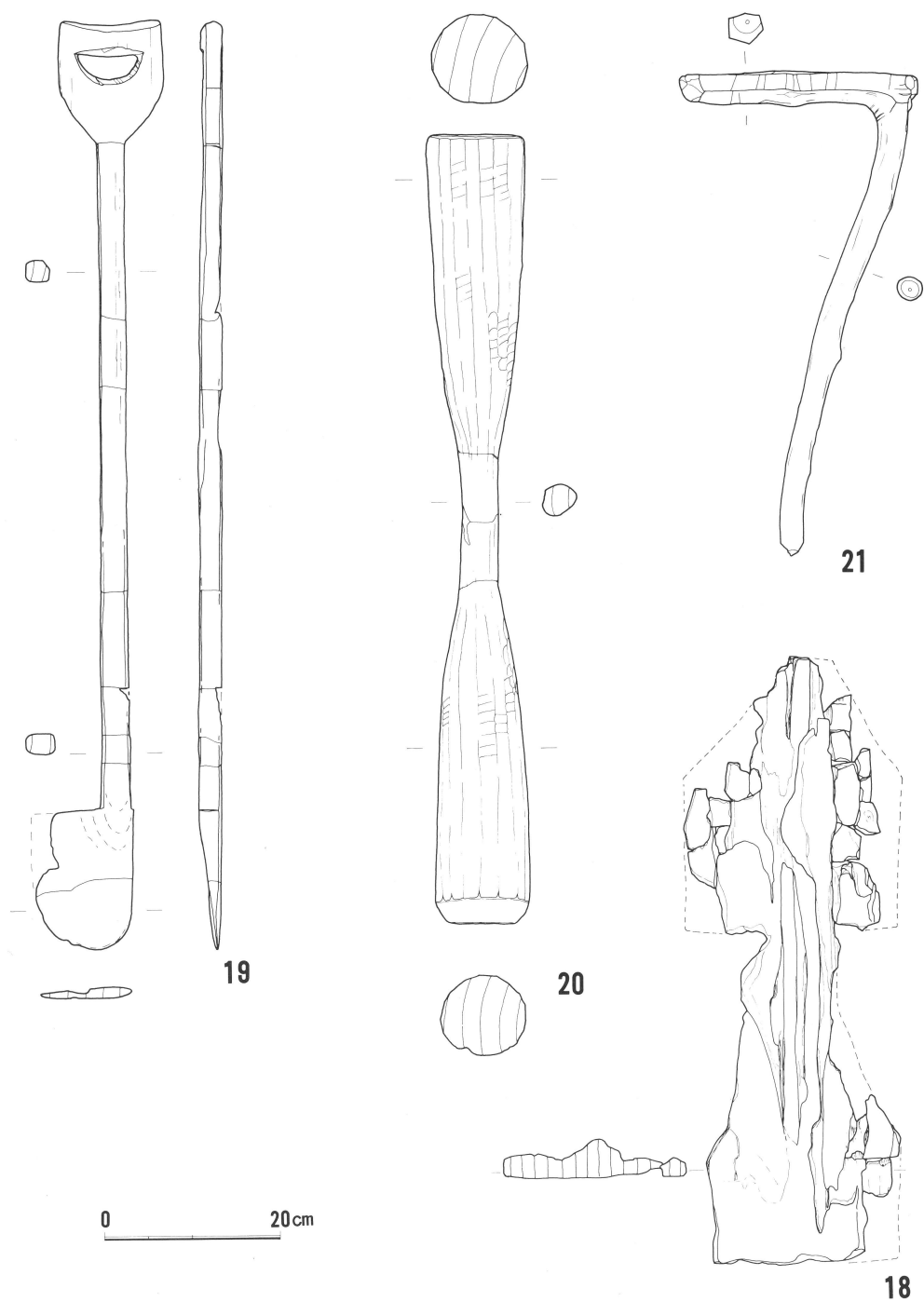
S X 03からは楯・刀形など、武具や祭祀具も認められるが、ここではS X 05同様、農耕具についてのみ述べる。(22)は狭鍬である。前面の柄孔周辺の隆起は著しく厚く、後面の頭部に段をもつ。同様の類例は滋賀県妙楽寺遺跡に見られる(滋賀県教委1982)。柄がわずかに遺存しており、身に対して鈍角につく。いわゆる踏み鋤である。(23)は従来ナスビ形着柄鋤とされてきたもので、ここでは町田氏の分類により、膝柄鍬Bと呼ぶ。ナスビのヘタの部分にあたる笠形の突起(笠部)は著しく退化しており、逆に肩部は極度に発達している。笠部と肩部の間のくびれ部には膝柄緊縛の際の紐の圧痕が残っている。肩部から刃部の下端にかけて、U字型の鉄製刃先を装着するため、ななめに大きく削り込まれている。刃部の先端はわずかに二股に分かれているが、鉄刃がつくために機能とは無関係である。(24)は鍬の膝柄である。台部の前面を平坦につくり、鍬の軸部と組み合わせて紐で縛る。そのため、後面に紐かけ用の溝を切るのを特徴とする。(25)は従来丸鍬とされてきたもので、近年の黒崎氏の研究により、広鍬(あるいは横鍬)に装着される泥除けであることが確認された(黒崎1988)。頭部が欠損しているため、実際の装着方法については不明である。樹種はコナラ属(アカガシ亜属)である。



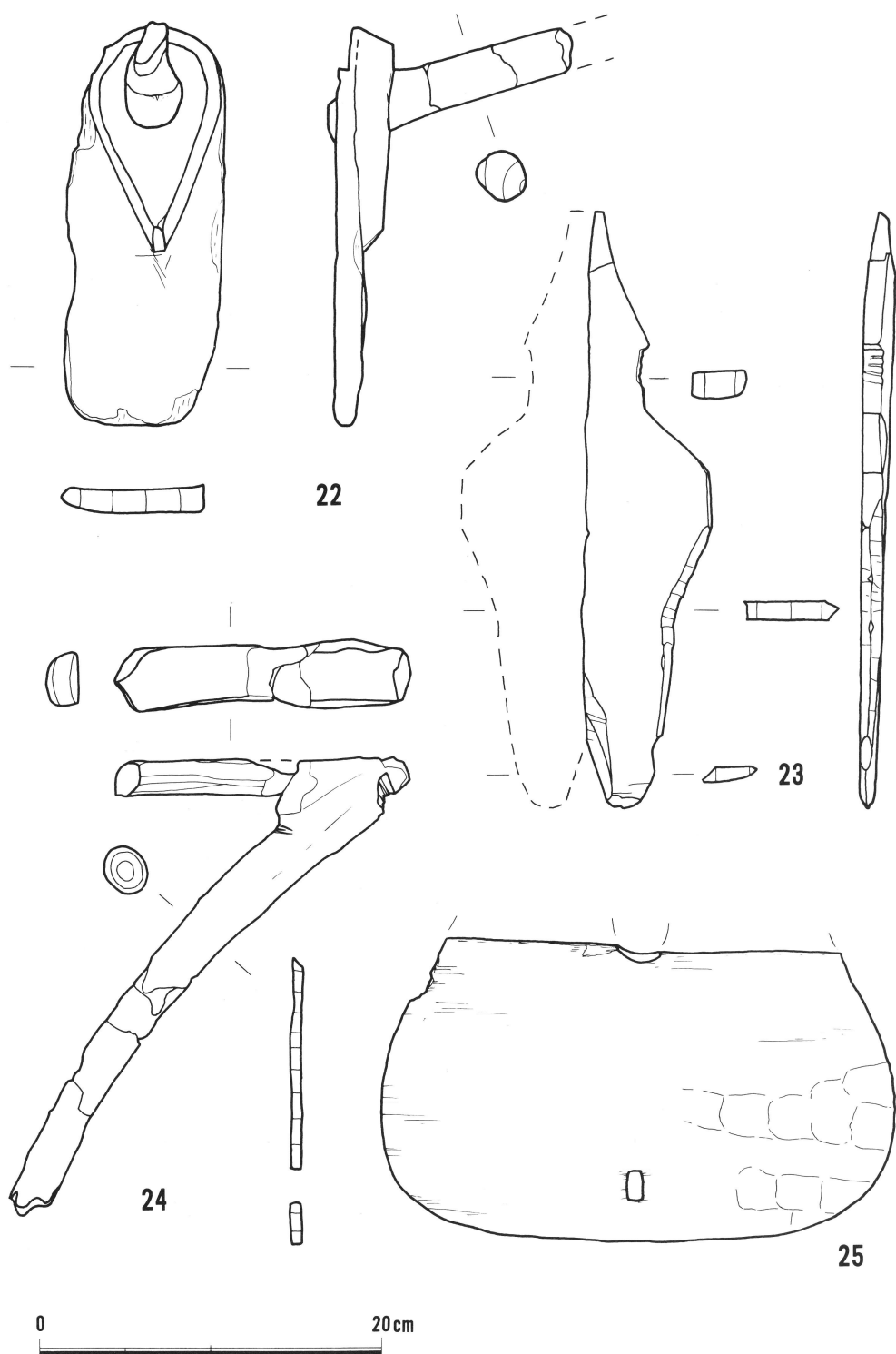
第4図 弥生時代後期～古墳時代前期 S X 05出土木製品



第5図 弥生時代後期～古墳時代前期 S X 05出土木製品



第6図 弥生時代後期～古墳時代前期 S X 05出土木製品



第7図 古墳時代中期 S X 05出土木製品

III

従来の研究

III章では、II章で紹介した勝川遺跡出土の木製農耕具を、近畿・東海・北陸・関東地方の他の遺跡の資料と比較し、農耕具の系譜と地域性について考えてみたい。その前に、小論に直接係わる範囲で先学の業績をまとめ、木製農耕具の研究の流れをつかむこととした。弥生時代の遺跡から出土する木製農耕具について、その形態から機能の推定を行う研究は1943年の唐古遺跡の調査報告に始まる（末永ほか1943）。このなかでは木製品の種類により樹種の使い分けが行われていることや、木製品をつくる際の木取りについてすでに述べられている。そしてその業績は1949・54年の登呂遺跡（日本考古学協会1949・54）や、1962年の山木遺跡（後藤1962）などに引き継がれていった。しかし、それらはいずれも現在の民俗例を用いて機能を想定する程度に留まっており、農耕具の持つ歴史的意義の解明にまでは及ばなかった。

その意味では1970年黒崎直氏によって初めて、農耕具の形態・組成・製作工程の変遷や所有の在り方から当時の社会の動向を解明する研究が開始されたと言ってよい（黒崎1970）。そしてこれが、その後の木製農耕具の研究の方向性を決定づけることになる。しかし、まだ資料不足のためか、農耕具の地域性については十分な認識がなされていない。

1975年、町田章氏は主として木製品の製作技術の解明を行った。さらに、九州と近畿の農耕具の違いについて触れ、農耕具に地域色のあることを認めた（町田1975）。

翌年、根本修氏は町田氏同様、木製農耕具の加工技術から論を進め、さらに細かく機能からの農耕具の分類とその機能の推定を行い、弥生時代の農耕具の変遷が湿田から乾田への水田耕作の変化と係わりがあると推定した（根本1976）。

同年、黒崎氏は初めて古墳時代の農耕具を扱い、特に古墳時代に特徴的に見られるナスビ形着柄鋤なる器種の変遷に着目した（黒崎1976）。黒崎氏は、弥生時代後期末から出現するこの農耕具の機能を、それまでの広鋤にかわる水田耕起具と推定し、5世紀中葉にこれに鉄刃が装着されることにより、水田耕起具から開墾土木具に変化したとする。そしてこの変化を低湿地耕作の完成から乾田耕作の普及と拡大へと結びつけて考えた。最後の結論はさておき、この農耕具の消長や機能については、その後の類例の増加により、書き改めねばならぬ点が多い。

1980年代に入ると木製農耕具の出土例は急増し、地域によってその形態にかなりの違いがあることが認識され始めた。

まず、1980年に、平城宮下層出土の古墳時代の木製農耕具を整理した町田氏は、それま

で又鍬・又鋤・ナスビ形二又鋤など様々な名称で呼ばれてきた器種のうち、着柄用の軸部を持つものを、その出土例から膝柄に装着される鍬であると結論づけた(町田1980)。そして軸部が笠形に広がり、ナスビのヘタのかたちを呈するものを膝柄股鍬B、それ以外を膝柄股鍬Aとし、同様に従来、着柄鋤やフグシとされてきた例を膝柄鍬A・膝柄鍬Bと命名した。次に、これらの農耕具の系譜や地域性についても触れた。まず、これまで膝柄股鍬Aと膝柄股鍬Bは異なる器種と認識されてきたし、膝柄鍬Aと膝柄鍬Bも異なる器種と認識されてきた。しかし、このそれぞれが同じ系譜に連なって、時期を追って変化することを解明した。そして膝柄股鍬B・膝柄鍬Bの分布が畿内・瀬戸内を中心としていることを明らかにし、膝柄股鍬Bが北部九州の股鍬と畿内・瀬戸内の膝柄股鍬Aの合体によって発生したものと推定した。さらに、これを弥生時代前期からの農耕具の流れに含めて、この時期の農耕具の変化は中国で新たに開発された農法が九州に伝わり、九州から畿内へ流れた結果生じたものと結論づけた。この研究における町田氏の最大の業績は膝柄股鍬A・Bと膝柄鍬A・Bを同一の系譜に連なるとした点にある。しかし一方では、畿内以外の地域、特に東海以東におけるこれらの器種の地域色が十分に認識されていない。

1982年、山田昌久氏は日高遺跡出土の「着柄鋤・鍬」(町田氏の言う膝柄鍬Aを鋤にも鍬にも使えるという理解からの命名である)の分布について論じている(山田1982)。それによると、「着柄鋤・鍬」は九州から山陰・近畿・東海・関東にかけて分布している。しかし九州のそれは日高遺跡のものと系譜が異なり、近畿では農耕具に占めるこの器種の割合が低いため、関東の「着柄鋤・鍬」については直接的には東海との関連性を強調している。

1983年には埋蔵文化財研究会で「木製農具について」と題する研究集会が開かれ、近畿以西の資料集成が行われた(埋蔵文化財研究会1983)。

1985年に黒崎氏は新たに農耕具の器種の分類を行い(黒崎1985)、ここで従来の「着柄すき」・「長柄すき」をそれぞれ「組み合わせすき」・「一木すき」と改称した。さらにすべての器種の機能の想定をした。しかし、地域差や時期差が明確に捉えられていないため、明らかに同一系譜に乗るものが、別の器種として扱われている例が見られる。その他、農耕具の変遷や地域性についても若干触れてはいるが、やや大雑把で一般論の域に留まっている。

1986年、弥生時代中期末から古墳時代前期にかけての木製農耕具が大量に出土している新保遺跡の報告書が刊行された。山田氏はここで、全国の木製農耕具の資料を集成し、それらを九州・近畿・東海・関東に分け、弥生時代草創期・前期・中期・後期・古墳時代の5時期にわたる農耕具の変遷を図示し、説明を加えている(山田1986)。各時期における農耕具の地域差の認識と地域間の交流の解明を目指していることはこれからも継承されるべき点である。しかしながら、このなかでは器種ごとのタテのつながりが捉えられていない。

また、九州・近畿・東海・関東という大きな枠にとどまり、そのなかのさらに細かな地域差にまで踏み込まれていない。弥生時代を4期に分けながら、古墳時代を1時期として扱うことも疑問である。

1988年の『考古学ジャーナル』は「弥生時代の木製品」を特集した（石野ほか1988）。

最後に、1988年の日本考古学協会静岡大会で黒崎氏は、これまで丸鍬とされてきたものが、実は蟻じゃくりやゲタのつく広鍬と組み合わせあって泥除けとしての機能を果たすのだとした（黒崎1988）。そして、弥生時代農耕具変革の画期はまず諸手鍬の消滅する中期後半、次いで農耕具の鉄器化とナスビ形農耕具の出現する後期とした。

山田氏は、東海以東の木製農耕具出土遺跡の一覧表と共に極めて細かい器種の分類案を提示している（山田1988）。しかし、この分類にはその所属時期が示されていない。そして、同一器種を果たしてここまで細かく分ける必要があるのか否かも疑問である。

以上のこれまでの研究史を問題点を提示しつつ、かいつまんで紹介してきた。次章ではこれらの研究を継承しつつも、これまで充分検討がなされてこなかった農耕具の系譜と地域色の把握をその分布と時間的推移から見ていく。小論では検討の対象とする器種として、前章で分類した広鍬Aと町田氏の分類による膝柄股鍬A・B、膝柄鍬A・Bを扱う。それには、広鍬Aは弥生時代中期に近畿から関東にかけての広い地域に分布すること・膝柄股鍬・膝柄鍬は弥生時代中期から古墳時代後期にかけて全国的に、量的に見られること・時期や地域によりその形態の違いが比較的明瞭に現われることが理由としてあげられる。検討する地域は近畿・東海・北陸・関東の4地域で、弥生時代中期から古墳時代後期以降にかけて見ていくこととする。

広鍬A・膝柄股鍬・膝柄鍬の分布の変遷

1. 弥生時代中期～後期の広鍬A（第8図） 従来、近畿で弥生時代中期の広鍬の代表とされてきたものである。近畿から関東にかけて11遺跡での類例がある。なお、小論で三重県は伊勢を東海、伊賀は近畿として扱う。

近畿では、大阪府の池上（1～4、大阪文化財センター1974・76）・亀井（5、大阪文化財センター1983b）・瓜生堂（6、瓜生堂遺跡調査会1982）・恩智（7～10、瓜生堂遺跡調査会1980）の4遺跡、奈良県の唐古・鍵遺跡（11、末永ほか1943）、東海では、三重県納所遺跡（12、三重県教委1980）、愛知県朝日（13～15、愛知県埋文センター1987）・勝川（16～18、愛知県埋文センター1988）・神明社南^{註3}の3遺跡、関東は、千葉県浜野川遺跡（19・20、千葉市教委1988）、群馬県の新保遺跡（22・23、群馬県教委1986）である。うち、勝川遺跡（18）と新保遺跡（22・23）の弥生時代後期の例を除けば、すべて弥生時代中期

に属する。一部完成品を含むが、多くは未成品である。形態は柄孔のまわりの隆起を厚く明確につくりだすもの（16など）と、あまり明瞭な隆起を持たないもの（1など）の2タイプに大きく分かれる。前者は東海以東に、後者は近畿に多く分布する。また、東海以東の例は、近畿のそれに対して、若干大型化する傾向が認められる点も指摘できよう。さらに、近畿の広楕は東海以東のものと比較して頭部の幅がわずかに広い。しかし、大局的に見ればこれらも同一形態の範疇で捉えられよう。また、製作技法のうえでも、2連ないし3連につくりだしたものを切り離すという点で共通性が見られる。

2. 膝柄股楕 次に、膝柄股楕の分布とその時間的推移を見る。町田章氏の分類に従い、その形態がナスビ形をとる例を膝柄股楕B、そうでないものを膝柄股楕Aとする（町田1980）。また、小論では二股の類例のみを扱うこととする。そして、時間軸は弥生時代中期・弥生時代後期～古墳時代前期の2時期に分ける。

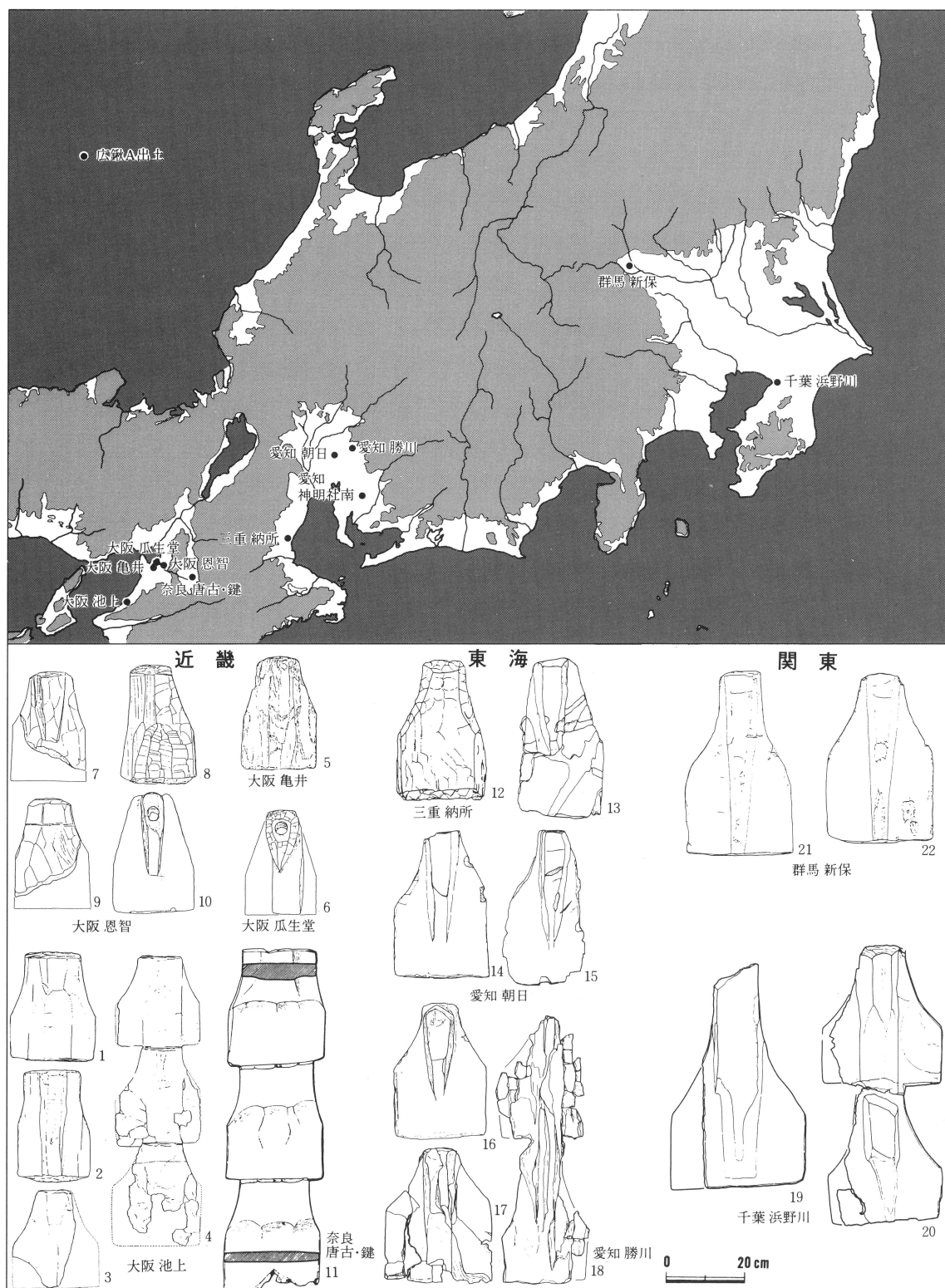
（1）弥生時代中期（第9図） いずれも膝柄股楕Aで、近畿から東海にかけて14遺跡の類例が確認されている。近畿では、大阪府の池上（1・2）・四ツ池（3、第2阪和国道内遺跡調査会1970）・亀井（4）・巨摩（5、大阪府教委1982）・瓜生堂（6～8）・東奈良（9、東奈良遺跡調査会1979）の6遺跡、兵庫県では玉津田中（10、兵庫県埋文調査事務所1986）・原田西^{註4}の2遺跡、京都府は鶏冠井（11・12、向日市教委1983）・中久世（13、京都市埋文研究所1986）の2遺跡、東海は、三重県納所遺跡（14・15）、愛知県勝川（16）・岡島^{註5}（17）の2遺跡、静岡県梶子遺跡（18、浜松市遺跡調査会1983）である。

弥生時代中期の膝柄股楕Aには広楕A同様大きな地域的差異は認められない。共通する特徴を述べると、軸部と刃部は断面カマボコ形を呈し、前面（使用者から見て）^{註6}を平坦に作り、肩部から刃部にかけて後面を先端に向かって削り込む。肩部はナデ肩、刃部は厚みがあり、1、2の例を除けば幅狭で長い。

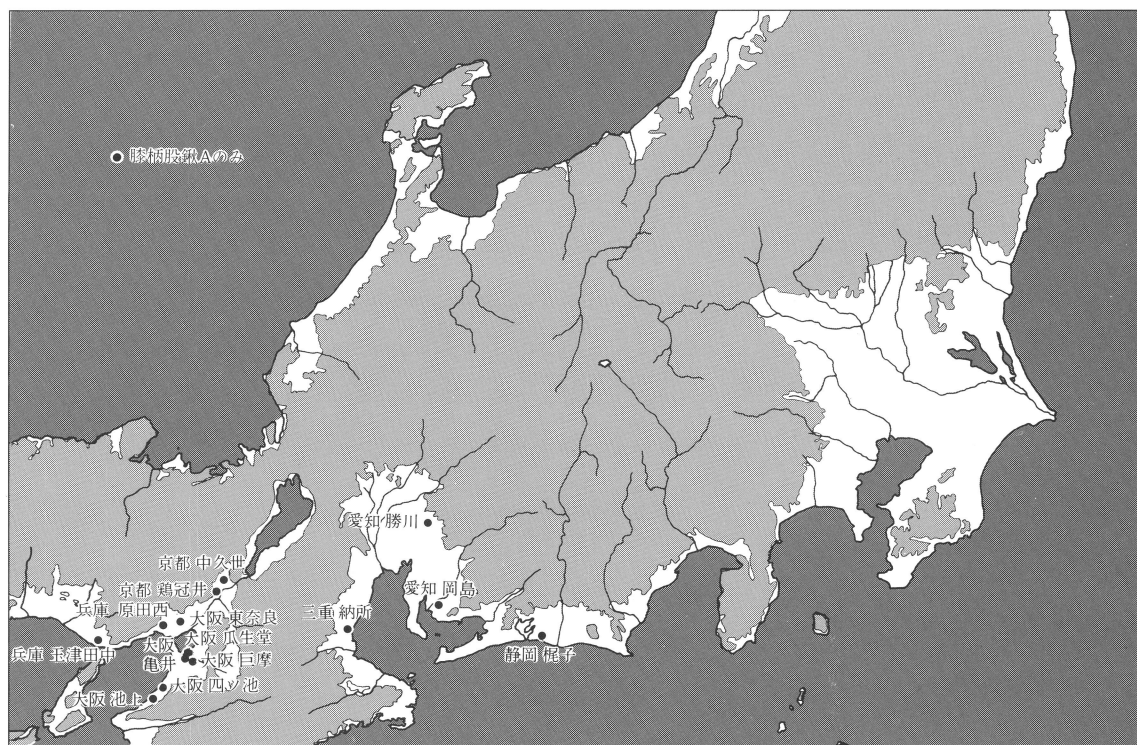
ただ、軸部の後面の形態に若干の地域差が認められる。すなわち、近畿の例では、軸部がずんどうで、頭部付近に膝柄装着用の段や突起を持つのに対し、東海の納所（14）・勝川遺跡（16）例は軸部のほぼ中央に一段明瞭な突起をつくりだす。この特徴は、後に述べる朝日遺跡の膝柄楕A（第11図9・10）の軸部にも同様に認められ、膝柄装着の際、使用時にズレを防ぐための東海地方独自の工夫と見ることができよう^{註7}。

以上、部分的には東海の独自色は認められるが、全体としては近畿の影響下にあると見られる点で広楕Aと共通する。

（2）弥生時代後期～古墳時代前期（第10図） 近畿を中心に北陸から北関東にかけて膝柄股楕B（ナスビ形）の出現が認められる。近畿では現在26遺跡出土例が有り、京都府岡

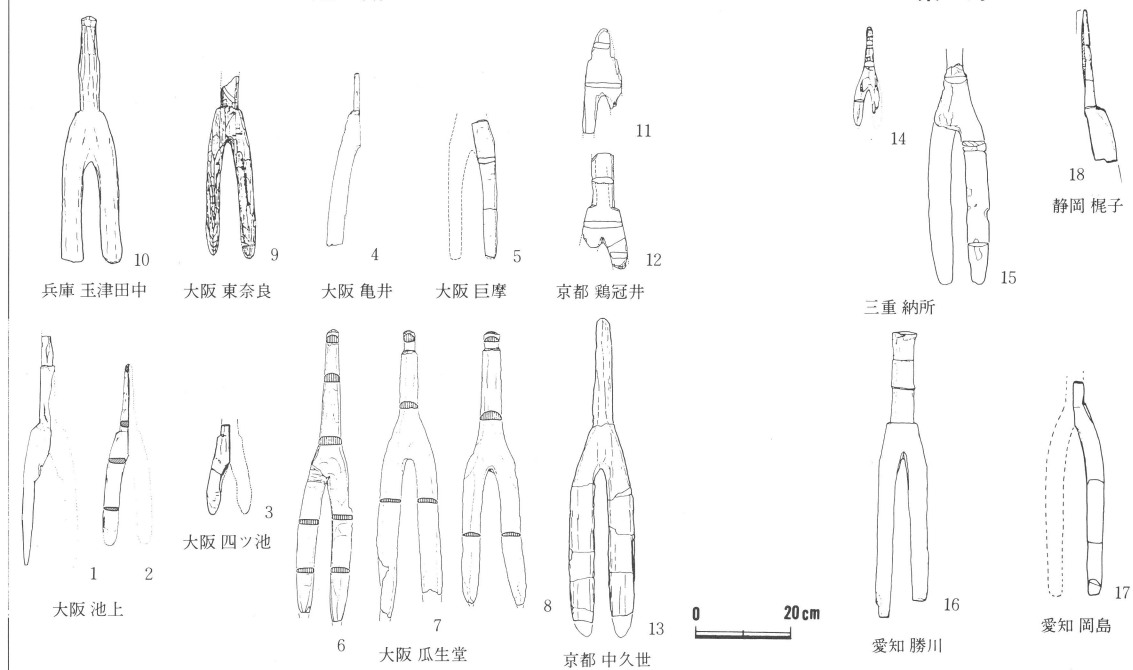


第8図 弥生時代中期～後期 広鋳A出土分布図

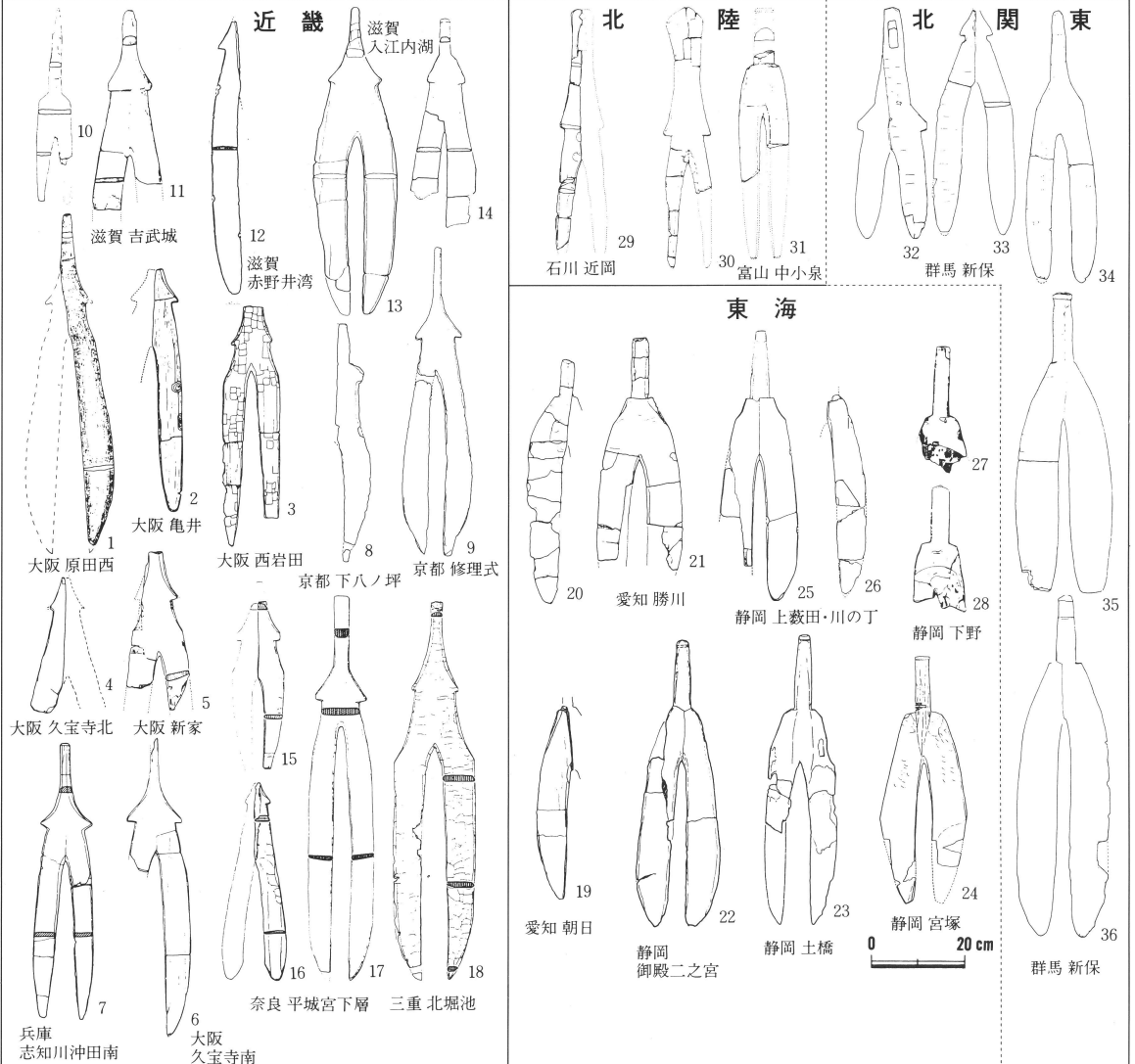
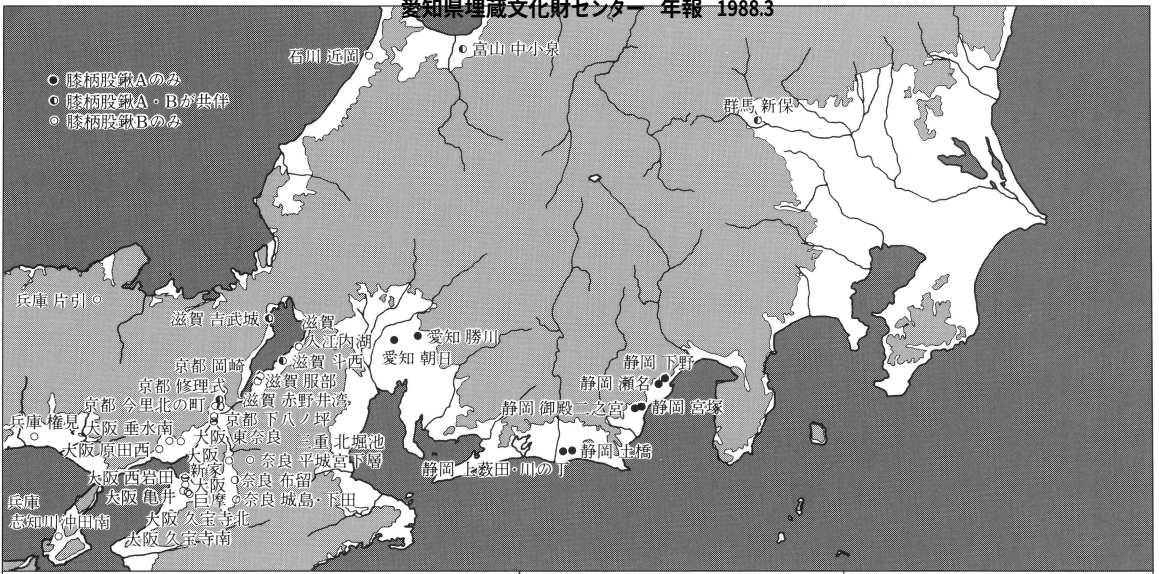


近畿

東海



第9図 弥生時代中期 膝柄股鍬出土分布図



第10図 弥生時代後期～古墳時代前期 膝柄股鍬出土分布図

崎遺跡（埋蔵文化財研究会1983）、滋賀県吉武城遺跡（10、滋賀県教委1987b）・斗西遺跡（能登川町教委1988）の3例を除けばいずれも膝柄股鍬Bとなる。一方、東海は近畿と異なり、依然として膝柄股鍬Aのみ9遺跡で出土し、膝柄股鍬Bは一例も認められない。また、北陸・関東では膝柄股鍬A・Bが共伴する。膝柄股鍬Bは、軸部には膝柄装着の際、使用時にズレを防ぐためにナスビのヘタ状の笠部をつくりだし、その上下の部分を紐で緊縛する形態をとる。

この時期、近畿の膝柄股鍬Bは軸部・刃部を含め、全体に偏平化の傾向を見せ、前・後面の区別はほとんどつかなくなる。そして、弥生時代中期の膝柄股鍬Aと比較して、刃部の幅広化傾向を示す。

東海の膝柄股鍬Aは、軸部こそ断面カマボコ形を呈するが、刃部は近畿同様、薄く幅広につくられる。

北陸の石川県近岡遺跡（29、石川県埋文センター1986）・富山県中小泉遺跡（30、上市町教委1984）の膝柄股鍬Bは、膝柄股鍬とは名ばかりで軸部に方形の柄孔を有して直柄装着用につくられており、笠部の機能はすでに形骸化している。

北関東の群馬県新保遺跡では、東海の系譜を引く膝柄股鍬Aが主体を占めるが、膝柄股鍬Bも3点見られる。うち1点は軸部に方形柄孔を有する点で北陸の影響が認められる。

以上、弥生時代中期には近畿から東海にかけてほぼ同一の形態をとる膝柄股鍬Aが分布していたが、弥生時代後期に至ると近畿は膝柄股鍬Bに変わる。それに対し、東海は刃部の幅広化など近畿の影響を受けながらもナスビ形の形態をとらず、膝柄股鍬Aを依然として保持する。関東は概ね東海の影響下にあり、膝柄股鍬Aがその主流を占めつつも、北陸からの膝柄股鍬Bの流入も認められる。三重県北堀池遺跡が膝柄股鍬Bのみであることから、近畿と東海は伊勢湾あたりで分かれるようである。また、北陸の膝柄股鍬Bは方形柄孔を有する点では、弥生時代中期の北部九州の二股鍬や三股鍬との共通性を見出し得る。しかし現在のところ、これら二地域を結ぶ山陰で方形柄孔を有する股鍬の類例が見られないため、その系譜については明らかでない。

古墳時代中期以降、後期に至るまで、近畿では膝柄股鍬Bの出土例が確認されている。一方、東海では、当該期の木製品出土遺跡の調査例が少なく、膝柄股鍬の出土例は現在のところ知られていない。そのため近畿のように、膝柄股鍬Aから膝柄股鍬Bへ変化するか、あるいは膝柄股鍬Aがさらに続くのかは不明である。

3・膝柄鍬 器種の分類については膝柄股鍬同様、ナスビ形を膝柄鍬B、そうでないものを膝柄鍬Aとする。時期区分は弥生時代中期・弥生時代後期から古墳時代前期・古墳時

代中期・古墳時代後期以降の4期に分け、その形態の変化と分布の変遷を見ていくこととする。

(1) 弥生時代中期(第11図) 近畿から関東にかけて9遺跡の類例が知られる。大阪府は池上(1~3)・鬼虎川(4~7、東大阪市文化財協会1987)・巨摩の3遺跡、京都府は鶏冠井(8)・中久世の2遺跡、愛知県朝日(9・10)・篠束(11・12、小坂井町教委1960)の2遺跡、静岡県梶子遺跡(13)、千葉県は浜野川遺跡(14)である。軸部の頭に突起を設ける工夫は、池上・鬼虎川・篠束・浜野川遺跡を通じて見られる。刃部の幅は狭く、肩の張りは小さくて丸い。刃部の平面はしゃもじ形を呈する。広鋏A・膝柄股鋏A同様、この時期は地域差が少なく、近畿から関東にかけて一つの地域圏を形成すると見てよからう。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期(第12図) 弥生時代後期には膝柄股鋏同様、近畿から北陸にかけて膝柄鋏Aから膝柄鋏Bに移り変わり、そのなかで北陸は独自色を持つ。一方、東海から関東にかけては依然として膝柄鋏Aが残り、近畿と大きく分かれる。

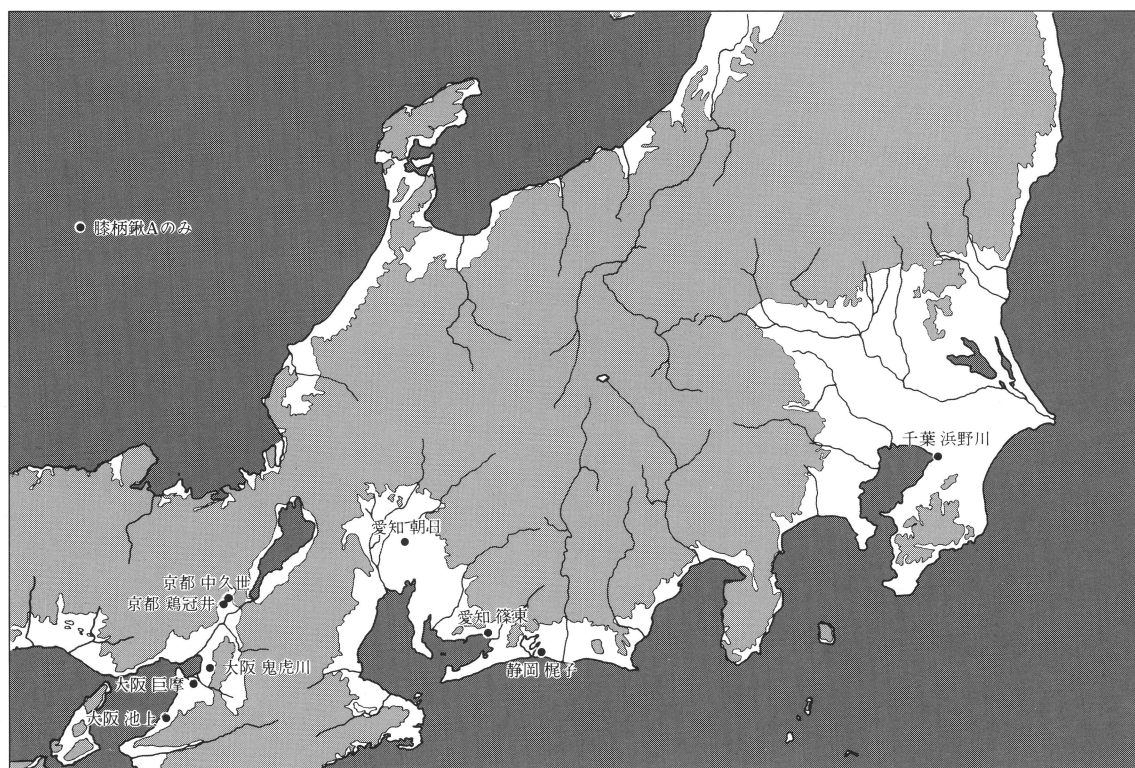
近畿の膝柄鋏Bはいくつかのタイプに分かれるが、概して刃部は長く、刃幅は若干広がる。

東海や関東の膝柄鋏Aの形態は弥生時代中期に比べて若干大型化し、肩部はナデ肩で、刃部はやや長くて幅広になり、その平面は長楕円形をなす。軸部に膝柄緊縛用の切れ込みを入れる例も見受けられる。

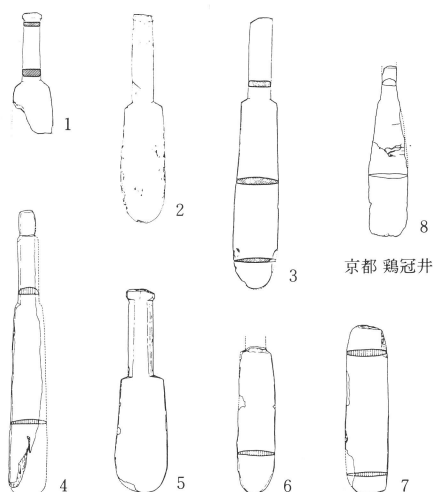
北陸では3タイプの膝柄鋏Bが見られる。まず一つは江上A遺跡(28、上市町教委1984)のもので、近畿のそれと共通する形態をとる。次に、中小泉遺跡の方形柄孔を有する例(29)は、同遺跡の膝柄股鋏Bと同じ範疇で理解できる。最後の、刃部にスリットを入れる二口六丁遺跡の例(30)は、現時点では他地域にその起源を求めることができない。しかし、弥生時代中期の山陰の膝柄鋏Bに見られる刃部の三角形のスカシにその系譜を求めることができるかも知れない(第15図)。

群馬県新保遺跡の膝柄鋏Aに1例、刃部にスリットを入れたものが認められ(31)、膝柄股鋏同様、関東には東海以外にも北陸的な要素を見い出すことができる。

次に膝柄鋏Aと膝柄鋏Bの分布を詳しく見てみると、前述のように、膝柄鋏Aは東海から関東にかけて、膝柄鋏Bは近畿から北陸にかけて分布しているが、兵庫県から大阪府・京都府、そして滋賀県の湖西にかけての地域が膝柄鋏Bのみであるのに対して、奈良県から滋賀県の湖東では膝柄鋏A・Bの共伴する遺跡が目につく。また、奈良県四分遺跡(17、弥生時代後期、奈文研1978)・三重県北堀池遺跡(18、古墳時代前期、三重県教委1981)・滋賀県入江内湖遺跡(13、古墳時代前期、米原町教委1988)では膝柄鋏Aしか見られない。膝柄鋏A・Bが共伴する遺跡のうち、奈良県の平城宮下層遺跡(奈文研14~16、1981

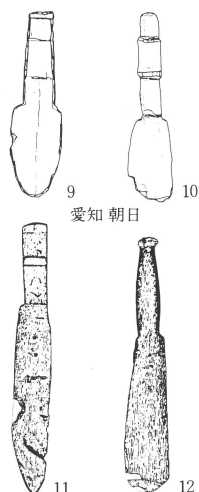


近畿



大阪 鬼虎川

東海



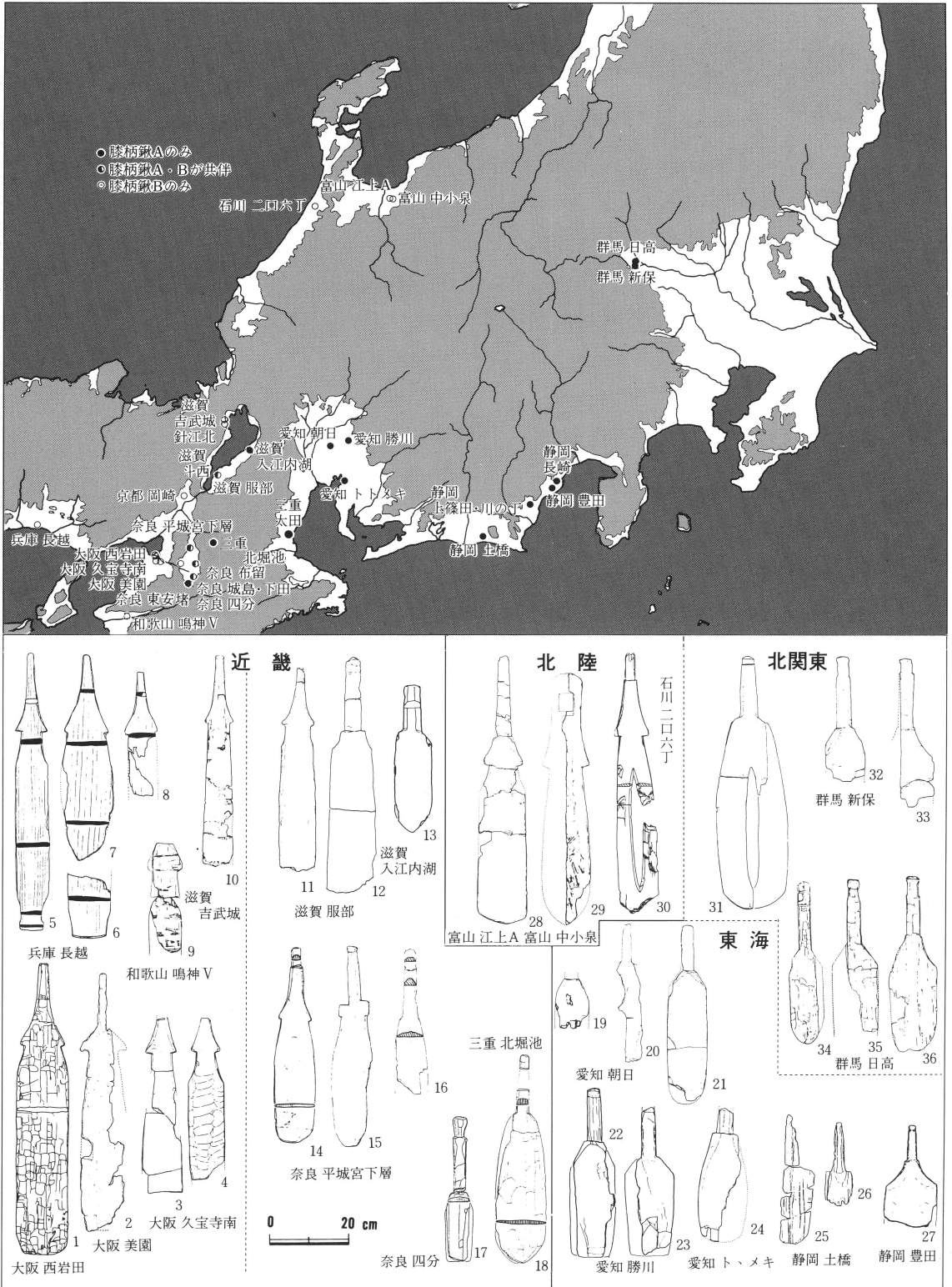
愛知 篠東

南関東

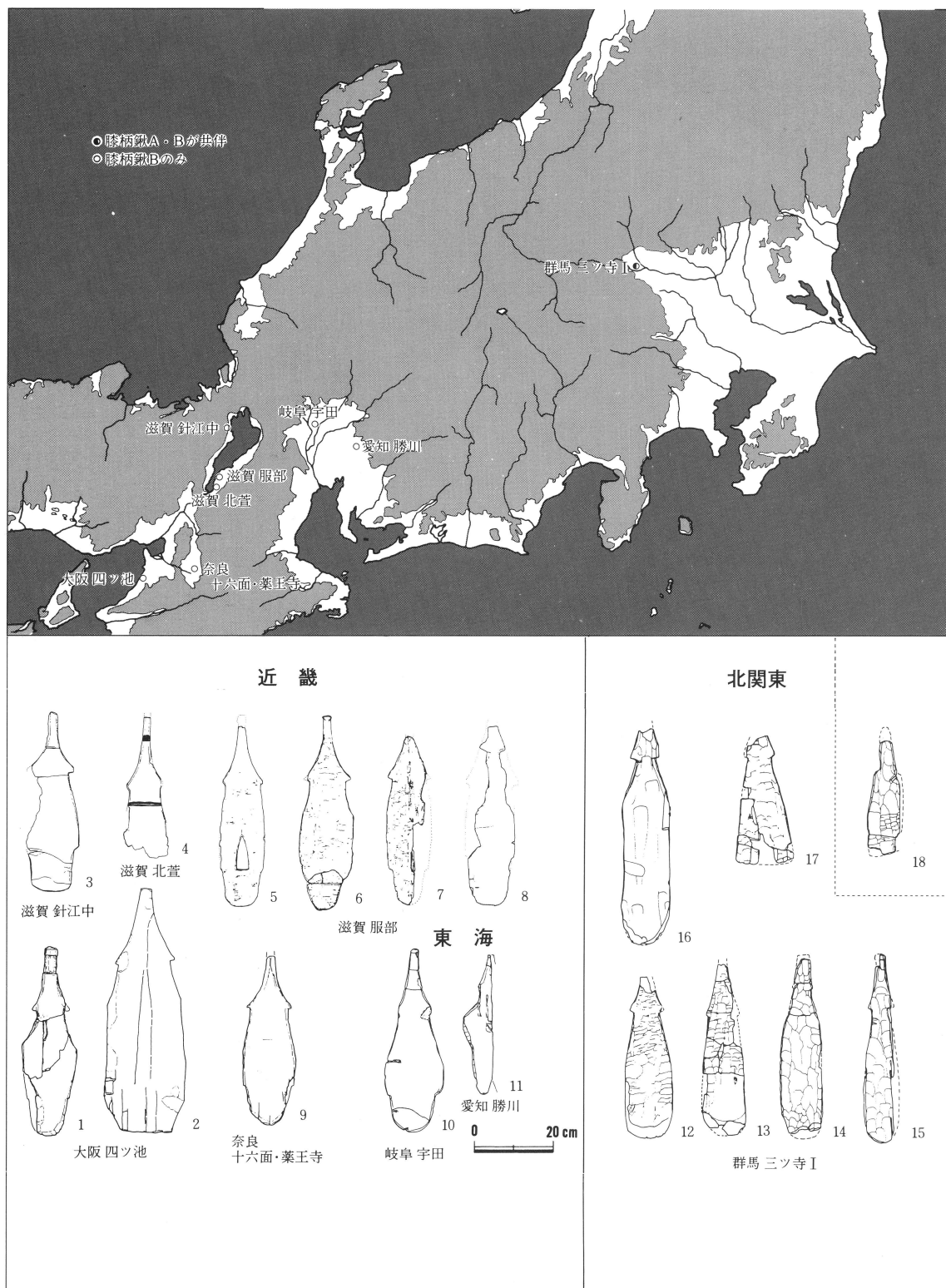


0 20 cm

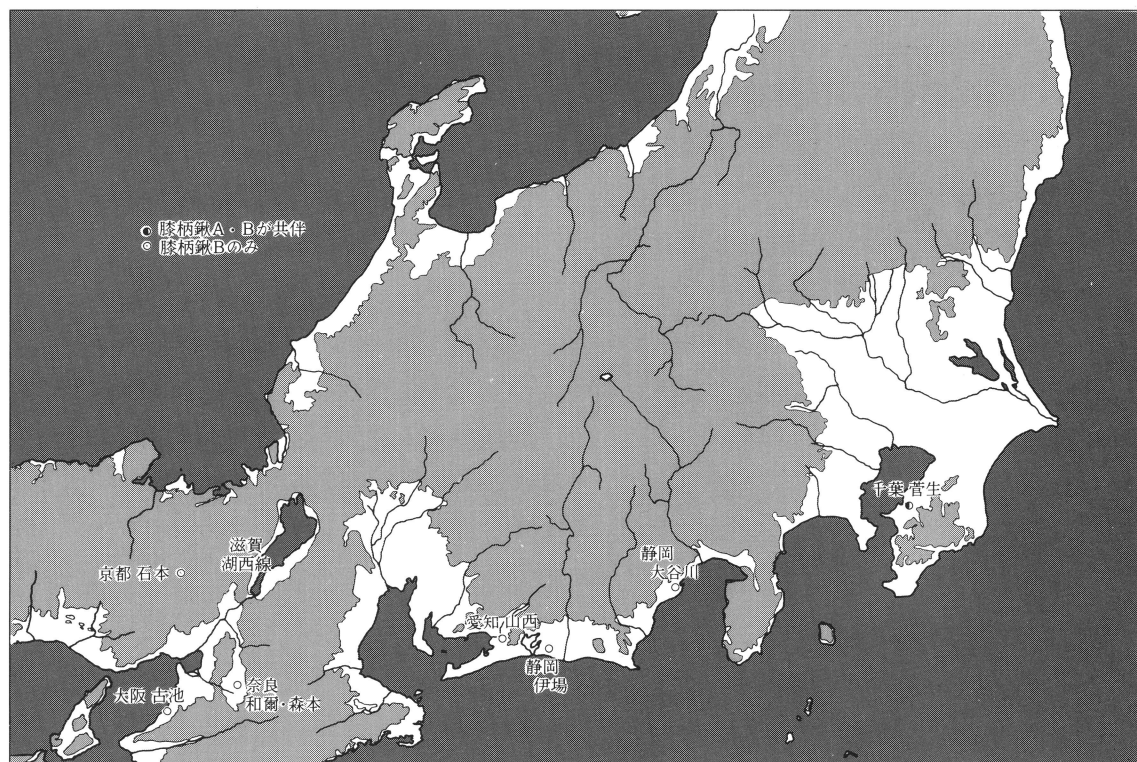
第11図 弥生時代中期 膝柄鍬出土分布図



第12図 弥生時代後期～古墳時代前期 膝柄鍬出土分布図



第13図 古墳時代中期 膝柄鍬出土分布図



第14図 古墳時代後期 膝柄鍬出土分布図

・83・86)・布留遺跡^{註8}・城島遺跡下田地区^{註9}・滋賀県斗西遺跡は古墳時代前期、滋賀県服部遺跡^{註10}(11・12)は弥生時代末から古墳時代初頭である。そして服部遺跡の膝柄鍬A(11)の刃部の形態は膝柄鍬B(12)のそれとほぼ共通する。斗西遺跡を除けば、これらの遺跡はいずれも膝柄股鍬Bのみで膝柄股鍬Aは見られず、膝柄股鍬Bと膝柄鍬Bの分布の広がりには若干のズレを生じている。

(3) 古墳時代中期(第13図) 弥生時代後期～古墳時代前期の段階では、近畿と東海が相対待するかたちとなっていたが、古墳時代中期に至って状況が一変する。膝柄鍬BにU字形の鉄刃が装着されるようになると共に、東海の岐阜県宇田遺跡(10、岐阜市教委1975)や愛知県勝川遺跡(11)で膝柄鍬Bが出現し、東海から膝柄鍬Aを駆逐していく。そして、膝柄鍬Bは規格化されたU字形鍬先に合わせたためか、近畿から東海にかけてほぼ同一形態をとるようになる。一方、膝柄鍬Aは群馬県の三ツ寺I遺跡(18、群馬県教委1988)に膝柄鍬B(12～17)と共伴して見られるが、数量的には膝柄鍬Bをかなり下回る。ただし、三ツ寺I遺跡の膝柄鍬BにはU字形鍬先を装着する細工は認められないため、膝柄鍬Bに鉄刃をつけるのは東海までのようである。

(4) 古墳時代後期以降(第14図) 古墳時代後期に至ると、関東の千葉県菅生遺跡(11～17、大場ほか1980)の膝柄鍬B(11～14)にU字形鍬先の装着例が認められるようになる。が、依然として膝柄鍬A(15～17)も共伴し、しかも興味深いことには膝柄鍬Aには鉄刃装着の痕跡は見られないのである。この時期、近畿から東海にかけての膝柄鍬Bは、笠部に退化傾向が認められ、それに比して肩部が著しく発達し、刃部は幅広で、全体に上下にひしゃげたようなかたちとなる。

7世紀以降、近畿では膝柄鍬Bの出土例はなくなるが、東海では静岡県伊場(9、浜松市遺跡調査会1975)・大谷川(10、静岡県埋文研究所1987)の2遺跡などが見られる。それらの形態は、古墳時代後期に見られた傾向がさらに進んだものになる。そして8世紀以降、膝柄鍬Bはその姿を消していくようである。

各地域での器種組成の変遷

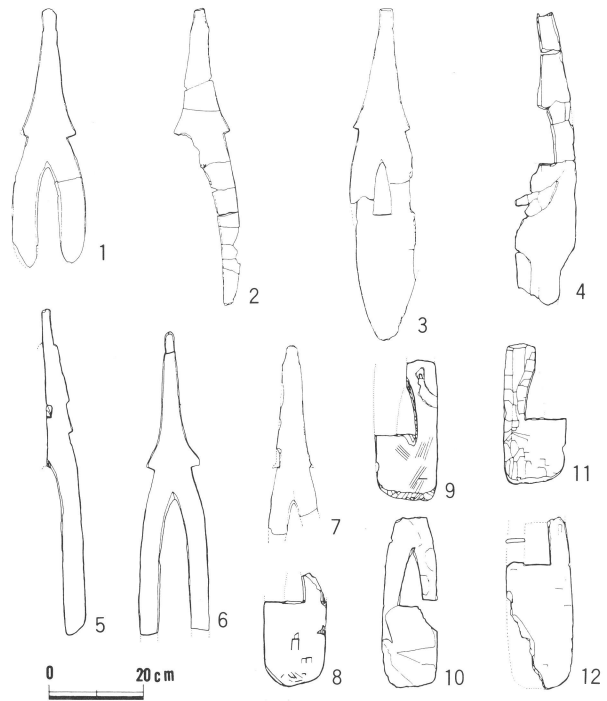
前章では広鍬A・膝柄股鍬・膝柄鍬それぞれの分布の変遷を各時期ごとに追って見てきた。そこで本章では、近畿・東海・北陸・関東の4地域で、各地域ごとにそれらの器種組成の変化を、弥生時代中期・後期・古墳時代前期・中期・後期以降の5時期に分け、編年案(第17～19図)を示してそのタテの流れを追うこととしたい。

1. 近畿(第17図) 弥生時代中期には広鍬A・膝柄股鍬A・膝柄鍬Aが見られる。広

鍬Aは恩智遺跡のⅡ～Ⅲ期の例を初現として唐古・鍵遺跡のⅣ期まで、河内・和泉・大和地域に中期を通じて見られる。膝柄股鍬Aは鶏冠井遺跡のⅠ～Ⅱ期を初例として、やはり中期を通じて摂津・河内・和泉・山城地域に分布する。膝柄鍬Aはやはり鶏冠井遺跡のⅠ～Ⅱ期を初めとして、中期を通じて河内・和泉・山城の地域で見られる。

弥生時代後期に至ると、まず広鍬Aが消滅する。そして、膝柄股鍬Aも岡崎・吉武城・斗西遺跡の例を除けばその姿を消し、膝柄股鍬Bに移行する。その分布範囲は、西は播磨の権見遺跡（兵庫県社会文化協会1972）や但馬の片引遺跡（埋蔵文化財研究会1983）で、東は近江の服部遺跡や伊賀の北堀池遺跡である。膝柄鍬Aも播磨・河内・山城といった地域では膝柄鍬Bに取って替られる。この時期の膝柄鍬Bは形態上概ね4タイプに分けられる。註11。一方、大和や近江では依然として膝柄鍬Bが根強く残り、古墳時代前期でもなお、平城宮下層・布留・城島・服部・斗西遺跡では膝柄鍬A・Bが共伴する。そして大量の膝柄股鍬Bが出土した北堀池遺跡には膝柄鍬Aしか見られない。このように、膝柄股鍬と膝柄鍬ではナスビ形への移行が地域によって若干ずれる現象が見られる。しかし、近畿での膝柄股鍬B・膝柄鍬Bの出現期としての画期はこの時期に設定できよう。

古墳時代中期の5世紀後半頃、膝柄鍬BにU字形の鉄刃が装着されるようになり、それと共に膝柄鍬Aがようやく姿を消す。近畿での次なる画期がここに設定できる。U字形鍬先の出現により、前段階で4類に分けられた膝柄鍬BはそのなかのⅢ類に鉄刃のつくタイプにはほぼ規格化される。また、服部遺跡には1例、刃部に三角形のスカシを持つものがあり（第13図5、滋賀県教委1984）、山陰の弥生時代中期の膝柄鍬B（第15図）に酷似することから、その関係が注目される。一方、膝柄股鍬Bは弥生時代後期からの流れで刃部の幅広化傾向を一層強める。また、数量的にまとまって見られるのはこの時



第15図 弥生時代中期山陰の膝柄股鍬B・膝柄鍬B（1～4 鳥取目久美遺跡、5～12 島根西川津遺跡出土）

期までである。

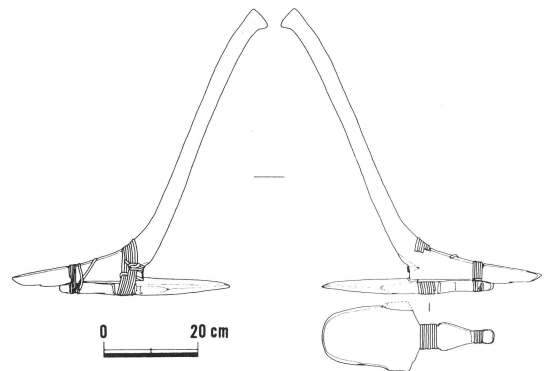
古墳時代後期には、膝柄股鍬Bは近畿の中央部でほとんどその姿を消し、周辺地域である丹波の石本遺跡（京都府埋文センター1987）などでわずかに確認されるのみである。膝柄鍬Bも数量的に減少するようである。形態は、肩部が著しく発達し、刃部に幅広化の傾向が認められる。そしてそれ以後、これらの器種はこの地方から完全に姿を消すのである。

2. 東海（第18図） 次に、東海の状態を見る。弥生時代中期の木製農耕具出土遺跡は東海西部に多く見られる。まず、広鍬Aは朝日・勝川・神明社南遺跡の3例が現在確認されている。膝柄股鍬Aの初現は弥生時代中期中葉段階に確認される。岡島遺跡の例がそれである。次いで中期後半には勝川遺跡が加わる。膝柄鍬Aは朝日遺跡で中期後半に見られる。いずれも形態上、近畿のものと大差はないが、中期後半段階の膝柄股鍬A・膝柄鍬Aの軸部にはこの地域特有の工夫が見られる。

弥生時代後期から古墳時代前期には、まず広鍬Aは2連の状態の未成品が勝川遺跡で出土している。膝柄股鍬Aは近畿の膝柄股鍬Bの影響を受けて刃部が薄くかつ幅広くなる。しかし、数量的には減少するどころかむしろ増加し、特に東海東部での類例が目立つようになる。膝柄鍬Aも同様の分布を示す。形態的には弥生時代中期と比べてやや大型化する。この時期、近畿の直接の影響を離れて東海の農耕具は独自の道を歩み、さらに関東にまでその影響を及ぼしていく。しかしそれは新たな方向を模索するものではなく、弥生時代中期以来の伝統に固執することから生じた独自性といえよう。

古墳時代中期には大きな画期が訪れる。弥生時代中期以来の広鍬A・膝柄股鍬A・膝柄鍬Aが姿を消し、かわってU字形鍬先を装着する膝柄鍬Bが出現する。この段階の膝柄鍬Bは宇田遺跡と勝川遺跡の2例が知られ、その形態は同時期の近畿のそれとほぼ共通する。時期は2例共にほぼ5世紀末頃で近畿ともさほど差はない。また、現在のところ膝柄股鍬Bの類例は見られない。

古墳時代後期には山西遺跡（豊川市教委1988）で、それ以降は伊場遺跡や大谷川遺跡で膝柄鍬Bの出土例が知られる。いずれも近畿の例同様、笠部が退化し、肩部が著しく発達する。大谷川遺跡の例では特に前者の傾向が顕著に認められる。そして、同遺跡例の膝柄



第16図 静岡・大谷川遺跡出土の膝柄鍬B

握部の端に特徴的に見られるかえり（第16図）は、現在の静岡地方の鍬の「かなぐり」と呼ばれるものと共通し（静岡市立登呂博物館1983）、現代に続く地域色の成立という点では極めて興味深いものである。

3. 北陸（第18図） 北陸での膝柄股鍬・膝柄鍬の類例は、弥生時代後期から古墳時代前期にしか確認できない。まず、膝柄股鍬Aは、中小泉遺跡に類例が見られる。その形態は近畿・東海の弥生時代中期の例に近似する。そして、同じく中小泉遺跡や近岡遺跡では膝柄股鍬Bが出土している。その軸部には方形柄孔があり、すでにナスビ形の笠部の本来の機能は喪失している。二股鍬に方形柄孔を穿つ例は弥生時代中期の北部九州で多く認められており、それらとの関係が注目される。一方、膝柄鍬Bには3タイプある。一つは江上A遺跡の例で、近畿の膝柄鍬Bに類する。次は、刃部にスリットを入れる二口六丁遺跡の例である。弥生時代中期の山陰には刃部に三角形のスカシを入れる膝柄鍬Bが一般的に見られるため、このタイプは山陰との関連で考えていく必要があろう。最後に膝柄股鍬B同様、方形柄孔を持つ例が中小泉遺跡に見られる。それと関連して、江上A遺跡には方形柄孔を有する膝柄鍬Aとも言うべき狭鍬が存在する。この例のみを見れば他の狭鍬と何ら違いはないのであるが、中小泉遺跡の膝柄鍬Bはまさにこれのヴァリエーションであり、前記2例の膝柄股鍬Bも同じ系譜で考えられることから、この江上A遺跡の狭鍬はやはり膝柄鍬Aとするべきであろうか。以上列記したもののうち、軸部に方形柄孔を有する膝柄股鍬Bと刃部にスリットの入る膝柄鍬Bは、それぞれ北関東の古墳時代前期の膝柄股鍬B・膝柄鍬Aに受け継がれていく。

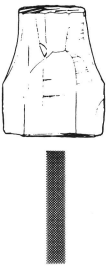
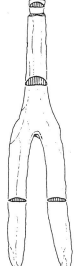
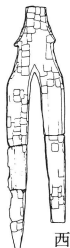
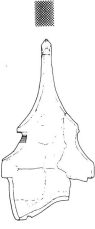
4. 関東（第19図） 弥生時代中期は浜野川遺跡の中期後半例が知られる。ここでは広鍬A・膝柄鍬A出土している。形態は近畿・東海のものとは大差はない。

弥生時代後期には新保遺跡で広鍬A・膝柄股鍬A・膝柄鍬Aが、日高遺跡では膝柄鍬Aが出土している。それらはいずれも東海のものとは共通する特徴を持つ。

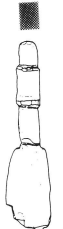
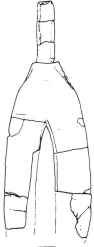
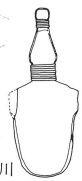
古墳時代前期には広鍬Aがなくなり、新たに膝柄股鍬Bが加わる。新保遺跡には膝柄股鍬Aの刃部にスリットを入れる例や、膝柄股鍬Bの中に軸部に方形柄孔を持つ例があることから、膝柄鍬A・膝柄股鍬Bには北陸にその系譜をたどれる一群が見られる。

古墳時代中期に至ると膝柄股鍬A・膝柄股鍬Bが姿を消し、膝柄鍬Bが現われる。膝柄鍬BにはU字形鍬先の装着例は確認されていない。

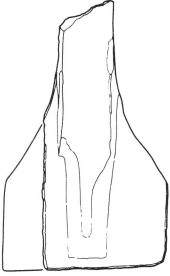
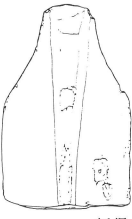
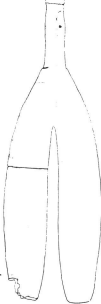
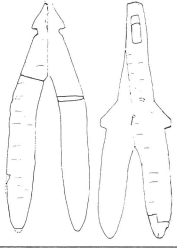
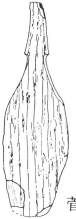
古墳時代後期になって、菅生遺跡の膝柄鍬BによりやくU字形鍬先を装着する例が見られるようになる。が、一方で膝柄鍬Aもこの時期まで残る。

	近畿					畿			
	広 鋏 A	膝柄股鋏A	膝柄股鋏B	膝柄 鋏 A		膝柄 鋏 B			
弥生時代中期	 池上	 瓜生堂		 池上		I 類	II 類	III 類	IV 類
弥生時代後期		 西岩田		 服部		 久宝寺南	 久宝寺南	 長越	 長越
古墳時代前期	 吉武城	 平城宮下層							
古墳時代中期		 平城宮下層						 服部	 服部
古墳時代後期以降		 石本						 和爾・森本	

第17図 広鋏、膝柄股鋏・膝柄鋏 編年試案(1)

東 海				北 陸	
広 鋏 A	膝柄股鋏A	膝柄 鋏 A	膝柄 鋏 B	膝柄股鋏B (膝柄鋏A)	膝柄 鋏 B
					
					
					
					
					
					

第18図 広鋏、膝柄股鋏・膝柄鋏 編年試案(2)

	関 東				
	広 鋏 A	膝柄股鋏 A	膝柄股鋏 B	膝 柄 鋏 A	膝 柄 鋏 B
弥生時代中期					
弥生時代後期					
古墳時代前期					
古墳時代中期					
古墳時代後期以降					

第19図 広鋏、膝柄股鋏・膝柄鋏 編年試案(3)

まとめ

以上検討してきたことをまとめると、次のようになる。

(1) 弥生時代中期の段階では、広楯A・膝柄股楯A・膝柄楯には近畿・東海・関東で共通する形態のものが見られる。

(2) 弥生時代後期になると、近畿・東海・北陸の3地域に大きく分化する。即ち、近畿では広楯Aが消え、膝柄股楯Aは膝柄股楯Bに、膝柄楯Aは膝柄楯Bに移行する。それに対して東海では弥生時代中期以来の伝統を強く維持して、広楯A・膝柄股楯A・膝柄楯Aはその形を変えつつもこの時期まで残る。北陸は近畿・九州・山陰などの影響で独特の農耕具を形成する。そして関東は東海の強い影響下に置かれながらも北陸的な様相もわずかに認められるようになる。この傾向は古墳時代前期まで続く。

(3) 古墳時代中期にはU字形楯先の出現によって東海に膝柄楯Bが流入し、再び近畿と東海に共通する器種が認められるようになる。一方、関東にも膝柄楯Bは現れるが依然として膝柄楯Aが残り、しかもそのいずれにもU字形楯先のつく形跡は見られない。

(4) 古墳時代後期にも近畿・東海でほぼ同じ状況が見られる。関東でもようやく膝柄楯BにU字形楯先が装着されるようになるが、未だ膝柄楯Aも残り、かつ膝柄楯Aには鉄刃はつかない。

以上、小論を書くにあたって、佐原真先生には文章から図版の作成に至るまで懇切なる御指導をいただいた。また、上原真人、赤塚次郎・石黒立人・宮腰健司の諸氏には多くの有益な御教示を得た。最後に、資料の実見や収集には下記の方々の御配慮を得たことを感謝します。浅生悦生・池本正明・岩田かおり・内田律雄・岡本茂史・金子裕之・神谷友和・木村有作・楠元哲夫・清水真一・楠真美子・立松彰・藤田和裕・朴美子・増田安生・宮原晋一・宮村典雄・山内紀嗣・山崎秀二・山口譲治・吉村和昭（敬称略・50音順）

註

1. 枝の分岐部を利用した、くの字型に屈曲した柄。knee-shaftからの訳語である（佐原1977、P.62）。
2. 同じ部分に小孔を穿つ例は大阪府鬼鹿川遺跡（東大阪市文化財協会1987）・長崎県里田原遺跡などに見られる。里田原遺跡については長崎県教育庁文化課藤田和裕氏の御教示を得た。
3. 知立市教育委員会岡本茂史氏の御厚意で実見させていただいた。
4. 奈良国立文化財研究所上原真人氏の御教示による。
5. 愛知県埋蔵文化財センター池本正明氏に資料の提供をしていただいた。
6. （佐原1977、P.64）の用語に従う。
7. 朝日遺跡の膝柄楯Aについてはすでに木村有作氏が指摘している（木村1988、P.91）。
8. 埋蔵文化財天理教調査団山内紀嗣氏の御厚意で実見させていただいた。
9. 桜井市教育委員会清水真一氏の御教示による。
10. 守山市立埋蔵文化財センター山崎秀二氏の御厚意で実見させていただいた。

11. 弥生時代後期～古墳時代前期の近畿の膝柄鍬Bは次の4類に分けられる。

I類 刃部は上下に長い。刃幅は筥部直下が最も狭く、下端に向かってハの字型に広がり、下端が最も幅広くなる。大阪府久宝寺南遺跡(第12図3、大阪文化財センター1987)・美園遺跡(第12図2、大阪府教委1985a)、奈良県城島遺跡下田地区、京都府岡崎遺跡、滋賀県古武城遺跡(第12図10、滋賀県教委1987a)などの例がこれにあたる。

II類 I類同様、刃部は上下に長い。筥部直下にくびれを持ち、くびれ部と刃部の境の肩部に明確な稜を設ける。刃幅は肩部から刃部下端までほぼ同じで真っ直ぐ伸びる。類例は大阪府の西岩田遺跡(第12図1、大阪文化財センター1983a)・久宝寺南遺跡(第12図4、大阪文化財センター1987)、和歌山県の鳴神V遺跡(第12図9、和歌山県教委1984)、奈良県東安堵遺跡(榎考研1983)・布留遺跡、滋賀県針江北遺跡・服部遺跡(第12図11)などに見られる。

III類 刃部の平面はほぼ長楕円形を呈する。刃部の最大幅はI・II類と異なり、ほぼ中央に位置し、刃部下端は丸くおさまる。兵庫県長越遺跡(第12図7、兵庫県教委1978)、奈良県平城宮下層遺跡(第12図14、奈良研1986)にその類例が見られる。

IV類 筥部から刃部上半にかけてはII類とほぼ同様の形態をとるが、刃部下端付近で内側に切れ込むようにくびれる。これは方形で両端を折り曲げた鉄刃を装着するための細工と見られる。現在のところ、兵庫県長越遺跡での2例(第12図5・6)しか見られない。

以上のように分類できるが、本文とは直接関連性を持たないために註でこれを記した。

なお、第9図10・13・18、第10図22、第11図13、第12図27、第13図9は写真からのトレースのため、縮尺や細部の形態については実際と異なる可能性があることを附記しておく。

参考文献

石野博信ほか

1988 「特集・弥生時代の本製品」 『月刊考古学ジャーナル』 6月号

大場磐雄・乙益重隆編

1980 『上総菅生遺跡』

木村有作1988 「木製農耕具について」 『考古学と技術』 同志社大学考古学シリーズⅣ

黒崎直 1970 「木製農耕具の性格と弥生社会の動向」 『考古学研究』 16—3

1976 「古墳時代の農耕具」 『研究論集Ⅲ』 奈良国立文化財研究所学報 第28冊

1985 「くわとすき」 佐原真・金関恕編『弥生文化の研究 5』 道具と技術Ⅰ

1988 「西日本における弥生時代農具の変遷と展開」 日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』

後藤守一編

1962 『伊豆／山木遺跡 弥生時代木製品の研究』

佐原真 1977 「石斧論」 松崎寿和先生退官記念事業会編『考古論集』

末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎

1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』 京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊

根木修 1976 「木製農耕具の意義」 『考古学研究』 22—4

町田章 1975 「木工技術の展開」 佐原真・金関恕編『古代史発掘 4』 稲作の始まり

1980 「S D 6030出土の木製品の検討」

「古墳時代農耕具の問題点」 『平城宮発掘調査報告X』 奈良国立文化財研究所学報第39冊

松崎俊郎1986 「乙訓地域弥生・古墳時代木器集成—農耕具を中心として—」 中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』

山田昌久1982 「木工技術の変化と特徴的な着柄鋤・鍬について」 群馬県教育委員会・(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団『日高遺跡』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集

1986 「くわとすきの来た道」 群馬県教育委員会・(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団『新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大溝編』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

1988 「東日本における稲作技術の展開と画期」 日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』

愛知県教育委員会

1982 『朝日遺跡』

(財)愛知県埋蔵文化財センター

1987 「朝日遺跡」 『年報 昭和61年度』

1988 「勝川遺跡」 『年報 昭和62年度』

石川県立埋蔵文化財センター

1986 『近岡遺跡』

猪名川流域原田下水処理場遺跡調査団

1981 『原田西遺跡 (大阪府域)』

磐田市教育委員会

1981 『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』

瓜生堂遺跡調査会

1980 『恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ』

1982 『瓜生堂遺跡Ⅲ』

大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

1982 『巨摩・瓜生堂』

1985 a 『美園』

1985 b 『新家 (その1)』

1987 『久宝寺北 (その1～3)』

(財)大阪文化財センター

1974 『池上遺跡 木器編』 第1分冊

1976 『池上遺跡 木器編』 第2分冊

1983 a 『西岩田』

1983 b 『亀井』

1984 『亀井遺跡Ⅱ』

1987 『久宝寺南 (その2)』

金沢市教育委員会

1983 『金沢市二口六丁遺跡』 金沢市文化財紀要32

上市町教育委員会

1984 『北陸自動車遺跡発掘調査報告—上市町木製品総括編—』

菊川町教育委員会

1986 『耳川遺跡 (Ⅱ)』 菊川町埋蔵文化財報告書第6集

(財)京都市埋蔵文化財研究所編

1986 『平安京跡発掘資料選 (二)』

京都府埋蔵文化財調査研究センター

1987 『石本遺跡』 京都府遺跡調査報告書第8冊

岐阜市教育委員会

1975 『宇田遺跡発掘調査報告書』

群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1982 『日高遺跡』 関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集

1986 『新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大溝編』 関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

1988 『三ツ寺Ⅰ遺跡 古墳時代居館の調査』 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

小坂井町教育委員会

1960 『篠束 第1次調査報告』

湖西線関係遺跡調査団

1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会

1982 「彦根市妙楽寺遺跡」 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ—1』

1983 「針江中遺跡」 『国道161号線バイパス関連調査概要 (昭和57年度) 3』

1985 「針江北遺跡」 『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要 国道161号線バイパス関連遺跡調査概要 (昭和59年度) 5』

1986 「赤野井湾遺跡」 『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』

- 1987 a「吉武城遺跡」 『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要 国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和61年度）7』
- 1987 b「御倉・北萱地区」 『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要2』
- 1987 c「赤野井湾遺跡」 『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書2』
- 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 1984 『服部遺跡発掘調査報告書Ⅴ—志願守山氏服部町所在—』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 1987 『大谷川Ⅱ（遺構編）』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第11集
- 1988 『長崎遺跡』 昭和62年度静岡バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査概報
- 静岡市教育委員会
- 1982 『駿河・豊田遺跡—静岡市外局建設予定地内遺跡発掘調査の報告—』
- 静岡市立登呂博物館
- 1983 特別展『静岡の鉄』図録
- 1988 特別展『静岡・清水平野の弥生時代』図録
- 島根県教育委員会
- 1988 『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）』
- 清水市教育委員会
- 1985 『下野遺跡』 国道1号線静岡バイパス（清水地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 第2 阪和国道内遺跡調査会
- 1970 『池上・四ツ池遺跡13』
- 千葉市教育委員会・(財)千葉県文化財センター
- 1988 『千葉市浜野川遺跡群（低湿地における遺跡確認調査）』
- 東海市教育委員会
- 1988 『ト、メキ遺跡』
- 豊川市教育委員会
- 1988 『山西遺跡』
- 長岡京跡発掘調査事務所・長岡京市教育委員会
- 1985 「長岡京跡左京第53次（7ANMSB地区）調査概要—左京六条二坊五・十二町、下八ノ坪・久我畷—」 『長岡京市文化財調査報告書第14冊』
- 長岡京市教育委員会
- 1982 「長岡京跡右京第75次（7ANIKC—3地区）調査概要」『長岡京市文化財調査報告書第9冊』
- 奈良県立橿原考古学研究所編
- 1982 「十六面・薬王寺遺跡」 『奈良県遺跡調査概報 1981年度』
- 1983 『和爾・森本遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第45冊
- 1983 『東安堵遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第46冊
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 1985 『大和を掘る』 1984年度発掘調査速報展
- 1988 『石舞台から藤ノ木古墳』 橿原考古学研究所50周年記念特別展
- 奈良国立文化財研究所
- 1978 「藤原宮西方官衙地域の調査」 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第31冊
- 1980 『平城宮発掘調査報告Ⅹ』 奈良国立文化財研究所学報第39冊
- 1983 「第1次朝集殿推定地の調査 第146次」 『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 1986 「推定第1次朝堂院東朝集殿地区の調査 第171次」 『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 日本考古学協会編
- 1949 『登呂』前編
- 1954 『登呂』本編
- 能登川町教育委員会
- 1988 『斗西遺跡』 能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集
- 浜松市遺跡調査会

- 1975 『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』
- 1983 『国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅳ次発掘調査概要』
- 浜松市教育委員会
- 1978 『伊場遺跡遺物編1』 伊場遺跡発掘調査報告書第3冊
- 東大阪市文化財協会
- 1987 『鬼虎川の木質遺物―第7次発掘調査報告書第4冊―』
- 東奈良遺跡調査会
- 1979 『東奈良 発掘調査概報』Ⅰ
- 兵庫県社会文化協会編
- 1972 『播磨・権現遺跡調査概報1』 兵庫県文化財調査報告書第6冊
- 兵庫県教育委員会
- 1978 『播磨・長越遺跡―昭和49・50年度調査報告書―』 兵庫県文化財調査報告書第12冊
- 兵庫県文化協会
- 1987 『淡路・志知川沖田南遺跡』 兵庫県文化財調査報告書第40冊
- 兵庫県埋蔵文化財調査事務所
- 1986 『弥生人のムラと暮らし―弥生時代の兵庫』 兵庫県埋蔵文化財調査事務所展示会図録No.3
- 袋井市教育委員会
- 1985 『土橋遺跡―基礎資料編―』 一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 藤枝市教育委員会
- 1981 a「宮塚遺跡」『国道1号線藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 第4冊』
- 1981 b「上藪田・川の丁遺跡」『国道1号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 第6冊』
- 埋蔵文化財研究会
- 1983 『木製農具について』 第14回研究集会資料
- 米原町教育委員会
- 1987 『入江内湖遺跡発掘調査報告書―米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査―』 米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅵ
- 1988 『入江内湖遺跡発掘調査報告書（行司町地区）発掘調査報告書―滋賀県文化産業交流会館建設に伴う発掘調査―』 米原町埋蔵文化財調査報告Ⅸ
- 三重県教育委員会
- 1980 『納所遺跡―遺構と遺物―』
- 1981 『北堀池遺跡調査報告』第1分冊
- 向日市教育委員会
- 1981 「長岡京跡修理第1次（7 ANBSS―1地区）分布調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告―第7集―』
- 1983 「長岡京跡左京第82次（7 ANEIS地区）～左京二条二坊一町・鶏冠井遺跡第2次～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書―第10集―』
- 米子市教育委員会
- 1986 『目久美遺跡』
- 焼津市歴史民俗資料館
- 1988 特別展『日本農耕文化の黎明』図録
- 和歌山県教育委員会
- 1984 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査